第 4 章

伊吹町地区計画プロセスにおける
伊吹町各地区の動きと現状の因果関係分析

第 4 章　伊吹町地区計画プロセスにおける各地区の動きと現状の因果関係分析

4−1 地区のグループ分け結果

6 ステップ達成状況によるグループ分けは次のとおり(表 4-1)。結果、委員会孤立型、目標未達成型は該当地区０であった。

表 4-1　伊吹町各地区のステップ達成状況とグループ分類

		1 委員長の理解	2 委員の理解	3 コミュニティの成熟	4 シンボルの認識	5 目標の具体化	6 目標の多様化	継続性
目標多様型	地区A	○	○	○	○	○	○	◎
	地区B	○	○	○	○	△	○	◎
目標単発型	地区C	○	△	△	△	○		○
	地区D	○	○	○	○	○		○
目標達成型A	地区E	○	△	○	○	○		
	地区F	○	○		○	○		△
目標達成型B	地区G					○		
	地区H					○		△
	地区I	○		△		○		
委員長孤立型	地区J	○						○
	地区K	○						
委員長無関心型	地区L							△
	地区M							△
	地区N							
	地区O							
	地区P							
	地区Q			△				△

上のステップ達成状況よりステップ達成図に表すと以下のとおり。

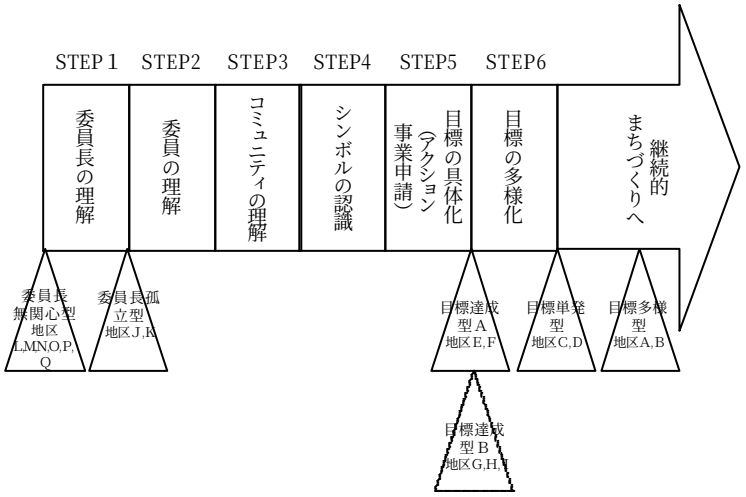

図 4-1　伊吹町各地区のステップ達成状況とグループ分類図

4－2 グループごとの概要

目標多様型（2）：「アクション事業」による事業提案を軸として、継続性をもったまちづくりを行っている地区。また、もうひとつの共通点として、それぞれ地区の独自性に合わせて地区推進委員会を再構築し、事業提案を行っている。

地区Ａは、アクション事業のテーマに、「五色の滝」を取り上げ、滝への道の整備および看板設置を行った。曲谷ダム周辺のゆり園や、五色の滝へ行く道をつくるなどの計画をおこない、アクション事業におけるの提案を基に、新しい事業展開をおこなっている。

地区Ｂは区民が 71 人(H12 年度)、世帯数は 16 件(地区Ｂ委員長より)ととても小さな地区であったため、行政側の提示した地区計画には反応しきれず、アクション事業にエントリーもしなかった。しかし、地区計画の心意を理解し、史跡をひとつのシンボルとして、アクション事業とは別の枠で事業展開をおこなっている。

目標単発型（2）： アクション事業をきっかけとしてまちづくりに対する姿勢が根付いた地区。しかし、ヒアリングを行った時点ではアクション事業以来、新しい動きがみられない状態の地区である。

地区Ｄはまちづくりのテーマとして、名水百選に選ばれている泉神社の湧水を取り上げ、湧水に来訪する人との交流を持つため「名水フェスティバル」を開催することをテーマとした。しかし、これからのまちづくりの方向性と継続性に不安を感じている。また、「(次につながる新しい事業提案は)ないです」と、テーマがひとつであることに不安を抱えている。

地区Ｃは、アクション事業として、過去に地区Ｃで盛んだった染物を見直すことをテーマに「刈安(染料)の染物の復活」を取り上げた。しかし、まちづくりの目標の直接の目的を「村の中の和、人づくり(地区Ｃ)」としており、アクション事業終了後も桜の木や梅の木を植えるといったまちづくり活動はしているのだが、”人の和”という漠然としたテーマを選んでいるため、事業としては一貫性がなく散発的な動きになっている。

目標達成型Ａ（2）：目標の具体化(アクション事業案提出)を行い、地区のシンボルに対する意識もほぼ共有されているが、アクション事業案提出後の新しい展開がなく、地区推進委員会も解散してしまったグループ。

地区Ｅは、地区のシンボルを桜並木のある「Ｅ川」とした。「新しい動きに発展させたいとは思ってるんやけど。いまのところ具体的な動きはないですんや。今度は歴史も見直していきたいと思ってるんやけど。(地

区E)」と、前向きな姿勢を見せつつも、地区推進委員会は解散してしまっている。

地区Fは、地区のシンボルを外部から見学目当てに訪れる人も多いという「桂の木」と「石仏」の２つに定めた。アクション事業に事業案を提出したが、地区内での反発が起こり、事業費 30 万円以上のお金を出すことが不可能となり頓挫した。この地区も、第 3 次発展計画の時煮形成された地区推進委員会が形骸化して残っているものの、具体的な動きはない。

目標達成型Ｂ（3)：アクション事業案を提出し、目標の具体化は果たしたが、まちづくりを進める基盤となる委員長の理解、委員の理解、コミュニティの成熟ができていないグループ。「まちづくり委員で話し合って目標を決めたんやけど、正直まとめるんでせいいっぱいでしたわ(地区G)」「とりあえず前から区誌を作ろうっていう話があって､それは前から言うてたんですわ。それを提出しようっていうことになって(伊吹)」「うちにはシンボルになるもんがないんでね。しょうがなしに。環境問題が今世の中で問題になってるでしょう(地区Ｉ)」などというコメントが聞かれた。地区Hは､第 3 次総合発展計画(平成 3 年)のときに形成された地区推進委員が形骸化したかたちで残っていて､今回の地区推進委員会には前まちづくりメンバーに平成 11 年度の区役員が入った形で進めていた。地区発展計画原案提出と同時に、再び区役員が抜けて、地区推進委員会は残ったが、特に動きはない状態である。

委員長孤立型（2)：委員長は地区計画に対して理解を示したものの、委員が地区計画に対して積極性をもって動かなかった､もしくはまちづくりには理解を示しつつも地区計画の取り組みに積極性をもって動かなかったグループである。「どうしても私（地区推進委員長）が長としての理想と区民との板ばさみになってしもてね(地区Ｊ)」「僕がひとりでこういった石碑を建てたりしたのよ(地区K)」など委員長が孤立してまちづくりを進めていたことも浮き彫りにされたグループ。

委員長無関心型（6)：委員長が地区計画に対して理解を示さなかった、もしくはまちづくりには理解を示しつつも地区計画の取り組みに積極性を持って動かなかったグループ｡継続性で△となっている地区はヒアリングの時点で地区推進委員会は継続していつつも､形骸化していて活動していない地区(「積極的に活動はしてないわ」地区M)（「今活動はしてないですね(地

区Ｌ)」(「今年度は１回しか集まってないですね（地区Ｇ）」）である。例外として地区Ｑはコミュニティの繋がりを深めるため､夏祭りや総出の復活といったまちづくりとしての動きはみられるのだが､地区計画に関しては､「アクション事業に関しては私があんまり取り組む意欲がなかった(地区Ｑ)」と消極的な態度コメントがあったので、委員長無関心型とした。

4－3 グループ比較

4－3－1 地区の基礎的要因からの考察

地区の基礎的要因として、①人口②高齢化率③総会回数④農村部と都市部から分析した。

① 人口

人口が 100 人未満の地区は、地区Ｍ・地区Ｋ・地区Ｂ・地区Ｃ・地区Ａの 5 地区である。やや人口が少ない地区のステップが高いという傾向がみられるものの、地区Ｄなどのように人口が比較的多い地区でもまちづくりに積極的な地区があることが分かる。

地区の大きさがまちづくりに直接影響してくるのが、①推進体制、②財政である。①推進体制としては、大きな地区がボランティアを募ってまちづくりを進めることができるのに対して、小さな地区は全戸が一丸となって協力しなくてはならない状況である。

「ちっちゃな区となると、それは一人の発言が非常に大きな意味を持つわね。大きい集落は一人くらい違うことを話しておってもほとんど問題にならんわね。そのひとつの動きっていうかそういうのが非常に小さい集落と大きな集落では違ってくるのよね。だから言葉は悪いけども大きい集落では横向いてる人があってもまとまっていくけども小さい集落では一人でも横向いておるものがあったらまとまっていかんわね。(中略)そういうことが小さい集落にとっては非常に難しいってことが言えるね。」（地区Ｋ：委員長孤立型）

「人口も少ない、人材も少ないということで、伊吹町がいくら計画っていうのを立てても掛け声だけで、まあ、大きいところもやる気のない集落もあるし、積極的に取り組む集落もあるし、　掛け声だけの集落もあるし、まあ、うちらのようにトップがやろうということになってもなかなか付いて来れない、お年寄りが 35%の高齢化率でしょ。」（地区Ｍ：委員長無関心型）

また、財政面でのコメントも多く見られた。区民から徴収したお金が主な収入源である地区にとって、区費を出す事業となるとなかなか総意が得にくいものである。「まちづくり」は個人にとっては危機迫った問題ではないため、区費を圧迫する事業となると内部での反発がどうしても多くなってしまうのが現状のようだ。

「こんな小さい地区Mが、財政が乏しいのに金を出すようなことはなかなかできなんし」（地区M：委員長無関心型）

「小さい区は経費、人員的負担が大きかったですよね。(地区Ｂ：目標多様型)」

今回のアクション事業補助金は一律 30 万円であるが、実際、事業をおこなっている 5 地区はみな 30 万円を超えた事業を行い、各地区が追加負担している。この追加負担分の区費の捻出の際、まちづくりに対する区民の理解が求められてくるのだが、限られた事業期間の中、地区推進委員会には事業決定から地区内の意見調整がひとつの大きなハードルとなっている。その負担を少しでも解消し、一歩を踏み出すきっかけとして利用されるためには、補助額を増やすこと、地区計画策定後にも事業提案しやすいような窓口となる場を設けること、アクション事業は 1 回きりでも、他の事業でまちづくりを継続的に続けていくことができることを伝え、理解してもらうことが必要であろう。

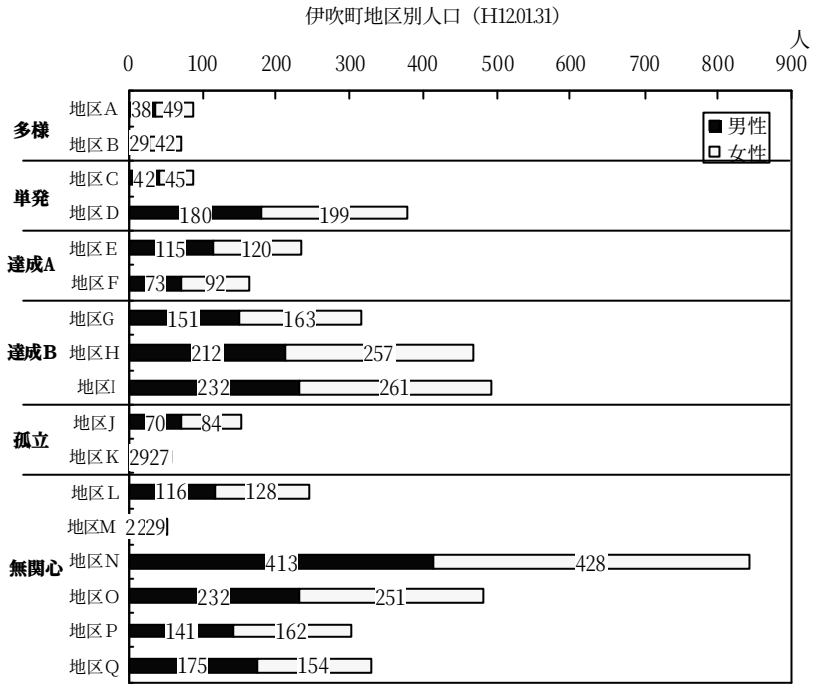

図 4-2　伊吹町各地区人口(平成 12 年 1 月 31 日現在)

②高齢化率

高齢化率に関しは、高い順に 1 位地区Ａ、2 位地区Ｌ、3 位地区Ｋという順番になっており、高齢化率とまちづくりに対する姿勢にはあまり関係性はないといえる。

地区Ａのステップ達成の高さから分かるように、高齢化が直接の原因にはなっていないものの、高齢者の負担を考えた気遣いがまちづくりに歯止めをかけていたり、高齢者の保守的な発言や態度がまちづくりの推進力を止めた地区も多くあることがヒアリングから明

らかになった。

「働いている人はええけども、もう退職して年金暮らしの人に出してくれいうていうのも気の毒やしねぇ。それでやめようかっていうてね、どうしたらええやろうかっていう風には話してるんですけども。」（地区Ｆ：目標達成型Ａ）

「計画を作ってもそんなもんいらんっていうて。うちの集落は年寄連中がもう…。こんなこと表立ってはいえんけどね。」（地区Ｎ：委員長無関心型）

「（老人の潰しも）ありますね。」（地区Ｄ：目標単発型）

また一方で、区政や役員は仕事を退職した人が担当する仕事であるという流れが大勢の中、若い世代がまちづくりに取り組んでいる地区もある。

「高齢化が進んで区の役員をする人がいなくなってきて、世代交代が急にやってきたんですよ。（中略）しなきゃいけない状況があるんで我々のしやすいようにとか、我々の世代からどういうふうにこの区をどうしていかなきゃならないのかとか、そういうことを若い世代の人間が関心を持たざるを得なくなるっていう状況にはありますけどね」（地区Ａ：目標多様型）

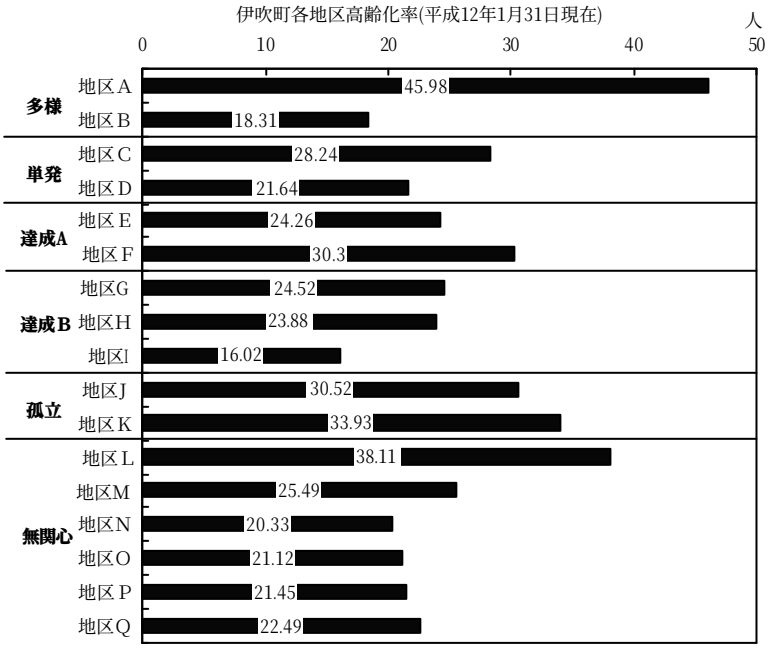

図4-3　伊吹町各地区高齢化率(平成12年1月31日現在)

これらの結果から、地区Aのように若手と高齢者が協議を深め、お互いの立場を理解した上で、協力体制を整えていく必要があるであることが分かる。また、高齢化の進む地区に活力を与える仕組みを提案する必要がある。

③ 総会回数

区民全体で区政について話し合う機会として、総会の回数からステップ達成状況について考察する。

『目標多様型』

地区Aと地区Bにおいては、総会回数は大きく違っている。

総会数の少ない地区Aがまちづくりの意識統一に至った経緯だが、地区Aは H13 年度に事業が終了する地区Aダムのおかげでここ 10 数年、行政からたくさんの恩恵を受けてきた。しかし、事業終了と同時に地区Aは「これからは自分達の力で何とかしないと(地区A)」という危機感が芽生えてきた。そののような危機感の中、地区計画事業が持ち上がったため、危機感がばねとなって積極性へと結びついたものと考えられる。

一方、地区Bは戸数が 13 戸しかない小さな地区であり、毎月総会を開いている。状況はほぼ地区Kと同じなのだが、個性を前面に出した合意形成を行うという地区Kと違い、地区Bは、「みんな言いたいことの 7 割 8 割で抑えて会議を進める」ため、ひとつの案件に対して折り合いをつけて団結することが日常的に行われている。この日常的につちかわれた合意形成システムが、まちづくりという場面でも役立ったと考えられる。

『目標単発型』

区民の少ない地区Cの総会回数が少し多い結果となっている。地区Cは戸数も少なく、総会やイベントが多いので、区に対する意識は比較的高いといえる。一方、地区Dは総会回数は年に 1 回と少ないが、名水百選に選ばれている泉神社の湧水があり、地区への来客も多い。また、全戸が名水保存委員として名簿上に名を記載しているため、湧水に関する意識が強く、区民の意識共有をしやすかったという背景を持っていた。

『目標達成型A』

地区Eの総会数が年 2 回なのに対して、地区Fは月に 1 回のペースで総会が開催されている上、桂の木を見るため他県からも来訪者があるなど、地区のシンボルとしての意識共有がしやすいという背景を持っている。そのため、意識共有がしやすかったものと考える。一方、地区Eは総会回数が少ないが、E川の桜並木はテレビ局の取材を受けるなど、区民の自慢としての意識が強かったという特徴と、地区Eは高校生から 40 代くらいの男性からなる「さつまクラブ」という野球チームを中心に若手の団結力が強いというコミュニティ

としての特徴を生かし、地区Ｅ川の桜並木整備を題材に取り組む要素を持ち合わせていたため、まちづくりに対する一体感をもつことができたと予想される。

『目標達成型Ｂ』

目標達成型Ｂの 3 地区は、いずれも総会回数は年 1～2 回で、春に区民選挙を行う程度である。いずれも、区民の区に対する意識を高めるというステップに到達するためには、総会数は少なすぎるといえる。そのため、コミュニティの意思統一が困難であったと予想される。

『委員長無関心型』

委員長無関心型では、ほとんど総会が行われていない。総会を実施せず、組長会が最高機関となっている地区Ｎなどの地区において、区の役員以外が区に対する意識を持つ機会を得ることは難しい。また、総会のない地区のほとんどは地区計画の話し合い結果も認証を得る事も無く進んでいるので、区民の総意を得にくく、ステップ達成段階が上がりにくかったと思われる。

『委員長孤立型』

委員長孤立型は、大きく異なる２地区である。総会の少ない地区Ｊは、委員長無関心型と同じ理由から地域に対する理解が得にくかったものと推測でき、一方、通常から月に一度総会が行われている地区Ｋでは、他事業を進めるにあたって地区内で対立が起こった直後であったため、総会回数が多意に関わらず、まちづくりに対するビジョンを共有するに至らなかったと予想される。

総会は、近年、その回数の減少、消滅の流れをたどっている。夏祭りなど古くから伝わるイベントも同様である。しかし、これらの区単位での行事は、区民の地域に対する認識を高め、区の一員である意識を区民に持たせるために必要な要素であるといえる。その重要性を認識し、地区Ｑのように総出を復活する地区も出てきている。

総出(区民全体での掃除)ってのはうちはずっとなかったんですよ。やっぱり総出って言うのは地域のことを考えていただくにはあったほうがいいということで今年は 2 回。(中略)まあ、ある意味ではわずらわしいんですけども。でもそのわずらわしいことが、逆に地域にとっては必要なことなのかも分からんです。若い人にとってはやっぱり逆に嫌なことですわな。出なならんということは。でもそうしないと地域の関心をもってもらえないですよね。お互いが持ちつ持たれつで地域はできてるんですから。（地区Ｑ：委員長無関心型）

総会回数が少なくても事業展開する際に意識共有ができている地区は、他地区からの来訪者がその地区の持つシンボルの重要性を日常的に教えてくれるという基盤を持っている地区である。自分の地区を見直したときに、地区外の人から注目されているシンボルを持ち合わせていない地区にとって、総会は区民に地区に対する意識を持たせ、土地に対するアイデンティティを共有する貴重な機会である。また、総会をあまり実施せず、来訪者からの「気付かせ」のみに頼っている地区(地区Ｅ・地区Ｆ・地区Ｄ)はアクション事業申請以降、新たな動きに発展していない地区ばかりである。この結果からも、区民全体で集まって話し合いをしたり、思いを共有しあう機会は必要不可欠な場であるといえよう。

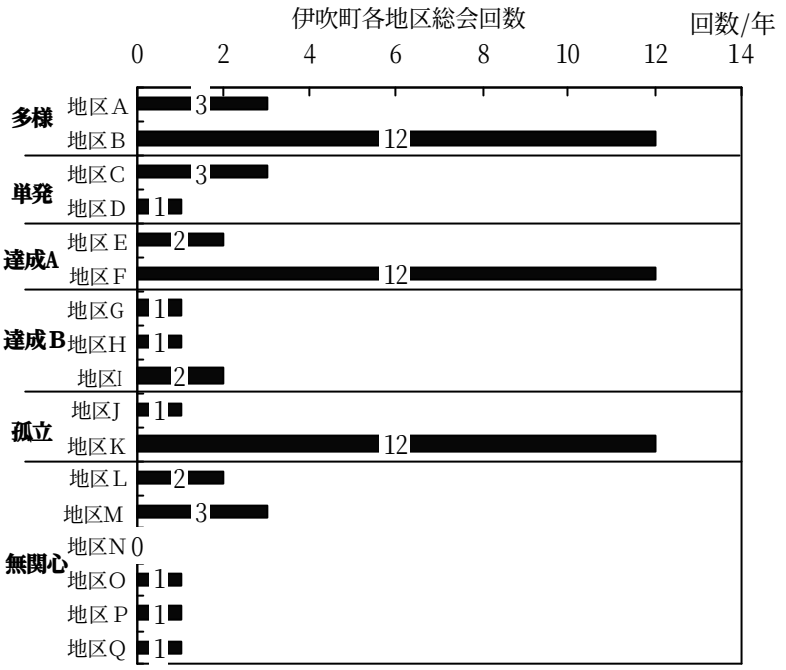

図 4-4　伊吹町各地区総会回数

④都市部と山間部

都市部と山間部での意識の違いから比較した。比較的都市部で伊吹山の登山口に位置する地区Ｎのコメントは以下のとおりで、危機感の薄さがうかがわれる。

「なかなか(まちづくりを)やろうと思うと莫大な金が入るし、そんな金は独自では捻出できんし、何かできることは無いやろうかと検討はやっとるんだけれども、今のところあまり活発には・・・。みんな仕事を持ってやっているんで…。みんななんとかせなぁかんという意識はあるんだけれども。よその辺鄙なところとは違って観光地と違って別に来てもらわんくても食べていけるわということで、切実感というのが無いんで進んでいかないというジレンマがあるんです。(地区Ｎ：委員長無関心型)」

一方、最も山奥に位置する地区Ｒのコメントは以下のように、まちづくりに対して積極的な態度が覗える。

「昔は製炭業で地区の 90%外生計を立てたんやけど、それがエネルギー革命やらで売れなくなってしまって（中略）そんな経緯があるもんで、常に危機感があって何事にも取り組んできたんです」地区Ｒ：比較対象外としている地区）

これらのコメントより山間部の区民は都市部に比べて過去から現在にわたって日常的に危機感を感じる機会が多く、現在でも高齢化、後継者不足などの不安を抱えている。そのような中、自分達の地区にしかないよさを認識し、団結していかなくてはという気持ちが農村部でのまちづくりに対する姿勢をより強いものにしたと考えられる。一方で、都市部は危機感が薄く、まちづくりの積極性をもてないという問題を抱えていることが分かった。まちづくりを必要、不必要と割り切ってしまうのではなく、まちづくりに取り組むことでコミュニティの活性化をはかり、それが生活基盤の充実に繋がるのだというまちづくりの必要性を行政や、地区をまとめる立場の人間が積極的に区民に伝えていくことも、事業提案の際に徹底すべきことであると考える。

◆ 地区の基礎的要因の考察結果

まちづくりに取り組むにあたって、プラスにはたらく要因は①在住地区の将来に対する危機感②外部からの来訪者による地区のシンボルの認識の 2 点である。

マイナスにはたらく要因は①年代間の相互理解不足②総会の消滅傾向による一般区民の地区に対する認識不足である。

しかし、プラスに働く要因をもっていても、区民がその長所をきっかけに地区への認識を高め、在住地区のよいところ、悪いところを見つめなおし、まちづくりのきっかけとする必要性を認識しない限り、継続的なまちづくりには至らないことが分かった。

4－3－2 地区推進委員長からの考察

地区推進委員長の要素からまちづくりリーダーとしての考察、課題をおこなう。委員長が名簿上の委員長と実務的に委員長の役割を担った人が異なる地区は実務的に委員長役を担った人のデータを採用した。

①地区推進委員長の選出方法

推進委員会発足年度の区長だった人がそのまま推進委員長を請け負うパターンが最も多い。次いで 11 年度代理区長が多いのは、区長の通常任務の忙しさから代理区長が請け負った、もしくは代理区長が次の年に区長になるという決まりがある地区では、2 年間の事業の委員長として適していると

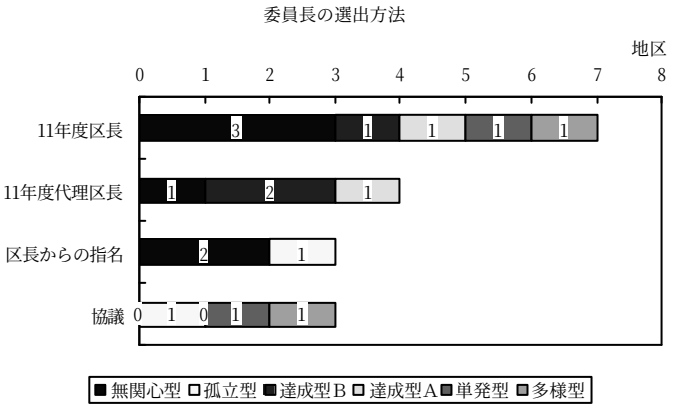

図 4-5 地区推進委員長の選出方法

判断したためである。また、協議で決めている地区は、全て総会数が多い地区であり、協議する機会を持ちやすかったためであると考えられる。

②地区推進委員長の年齢

60 代が最も多い。これは区の役員は仕事を退職した男性によって担われることが多いためである。

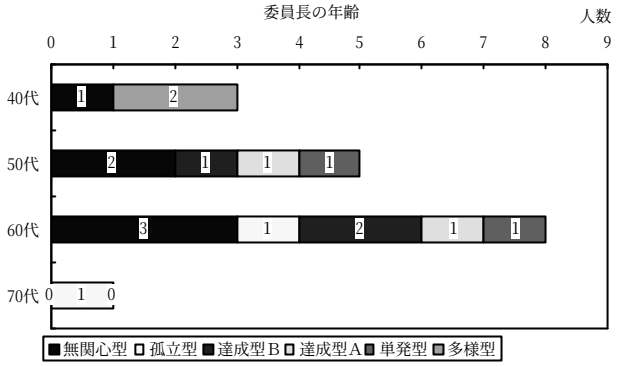

図 4-6　地区推進委員長の年齢

③地区推進委員長の居住パターン

1 年以上町外に居住経験のある人をＵターンとすると、土着の委員長とＵターンの委員長が半分ずつであることが分かった。人口の流動が少ない伊吹町において､Ｕターンの委員長の占める割合が比較的多いといえる。

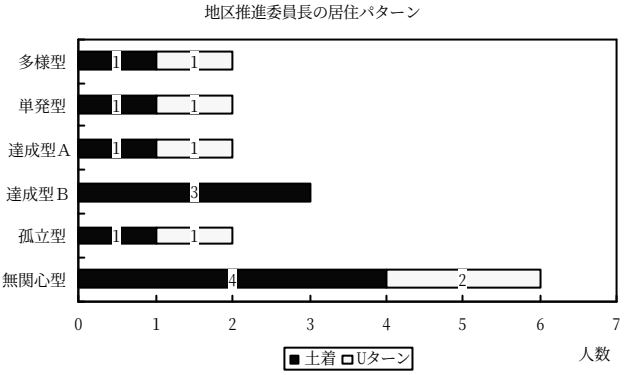

図 4-7　地区推進委員長の居住パターン

④ 地区推進委員長の勤務先

退職している人は現役の時に勤めていた場所を勤務先とした。グループ１の委員長が町内の勤務先である傾向が強いことに対して、ステップが高い地区の委員長は町外に勤務していた人が多いことが分かる。

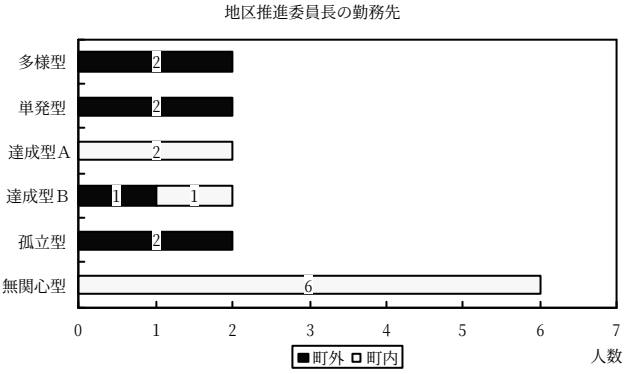

図 4-8　地区推進委員長の勤務先

⑤ ステップ達成と地区推進委員長の特性

◆選出方法からの考察

協議で決まった地区のステップ達成率が高い。協議で決めた地区は総会回数が多い地区と連動している。総会の多い地区は、地区計画への説明がしっかりなされているという前提があるものの、区民が委員長としてふさわしいという人を選んだ、また委員長が区民に

対してリーダーシップを取りやすいということが分かる。

逆にステップ達成率の低い選出方法は、区長からの指名で選ばれた委員長を持つ地区である。委員長に選ばれている人のほとんどが、地区の役員経験者であり、区民や役員をまとめる能力をもっていることは予想される。しかし、区長、代理区長が区民の総選挙で選ばれているのに対して、地区推進委員長は区政の中での位置付けもあいまいで、役職の裁量分野も確定していないため、リーダーシップを発揮できなかったものと思われる。「役員を退いたあとでも権限を与えてもらえんことには(地区O)」という委員長のコメントからもこのような背景が想像される。また、地区推進委員会を再構築し、委員会を区長の諮問委員会として位置付けた地区Dはこれからの委員会の行方について「区長さんの諮問委員会ですので区長さんが取り上げる取り上げんは区長さんの任意に任せてあります」と委員会の存続に対しての不安があることを語ってくれた。設置直後の委員会の位置付けは不安定なものであることというのが実情であろう。

◆年齢からの考察

ステップ 6 の委員長は二人とも 40 代である。若い人は 60 代、70 代の人に比べ、比較的 IT 関係に通じている人が多く、そのため、情報収集能力、プレゼン能力が高いなどのメリットがある。また、子どもが小中学生くらいで、子ども達に残したい地域のビジョンを描きやすいこと、そして配偶者は地区に来て 20 年未満であることが多いため、外部から居住地区を見た時のよきアドバイザーとなってくれる事が多い。そのため、30 代、40 代の若手の委員長が望ましいといえよう。だがその反面、仕事の合間をぬって委員長の仕事をしなくてはならないため、負担も大きい。

◆居住スタイルからの考察

先述のように、人口移動が少ない伊吹町において、ほぼ半数を U ターン組が占める。ステップ達成状況にばらつきがあるので、証明はできないが、別の地で生活経験をもつことから、他地区のまちづくりを見た経験があり、また、他地域から自分の地区を見る経験をしているという理由から地区推進委員長には外部居住経験者が適していると考えられる。

◆勤務先からの考察

勤務先は町外に出ている人が委員長に選ばれている地区のステップ達成率が高い。この現状の理由として、他市町村を見ることでまちづくりに対する意識が養われた、町外の勤務先に通ってまで現住地区に住みたいという愛着があるという理由が考えられる。

以上より下表(表 4-2)で色がついている要素が委員長に適した要素であると考えられる。次に地区ごとの状況から委員長について考察する。

表 4-2　地区推進委員長の要素とステップ達成状況

グループ名	地区	選ばれ方	年齢	居住スタイル	勤務先
目標多様型	地区A	Ⅰ	40	●	▲
	地区B	Ⅳ	40	◆	▲
目標単発型	地区C	Ⅳ	50	●	▲
	地区D	Ⅰ	60	◆	▲
目標達成型A	地区E	Ⅱ	60	◆	▼
	地区F	Ⅰ	50	●	▼
目標達成型B	地区G	Ⅱ	50	◆	▼
	地区H	Ⅱ	60	◆	▲
	地区I	Ⅰ	60	◆	▲
委員長孤立型	地区J	Ⅲ	60	◆	▲
	地区K	Ⅳ	70	●	▲
委員長無関心型	地区L	Ⅲ	40	◆	▼
	地区M	Ⅰ	60	●	▼
	地区N	Ⅱ	60	◆	▼
	地区O	Ⅰ	60	●	▼
	地区P	Ⅰ	50	●	▼
	地区Q	Ⅲ	50	●	▼

Ⅰ11年度区長　40＝40代　◆土着　▲町外
Ⅱ11年度代理区長　50＝50代　●Uターン　▼町内
Ⅲ区長からの指名　60＝60代
Ⅳ協議　70＝70代

■グループごとの考察

『委員長無関心型』

自分がまちづくりのリーダーとして責任がかかってくることを避けようとしている委員長と、自分がリーダーであることを自覚しつつも、委員長の気分でアクション事業に乗ってこなかった地区があることが分かった。

◆　<u>リーダー逃避型の委員長のコメント</u>

「将来のビジョンをかくために。ただ、実際それを延長して活発にやっている地区Ｓという地区なんかもその勢いでやっているところと計画だけ作ってパターンと終わってしまうところと。そのパターンとなっているのが私らのところなんですけど。というのはうちの地区にはある程度やっていこうというキーマンとなる人がいない。うちらの中に一肌脱いだろかという人がおらんのですわ。この計画について考える時もそうです。わしがやったろって人がいないんで。足を引っ張る方ばっかりで。(地区N)」

「住職っていうのは煩悩を除外して欲も出さずにって言われるでしょ。それが行政になると欲が絡んでくるわな。なんでもその、予算を取ろうとかいう欲が絡んでくるでしょ。だから正反対の仕事をせなあかんわけや。(地区M)」

「行政の中でも矛盾があるでしょ。せやから嫌になってしもてな。(地区M)」

「まちづくりにはリーダーが必要不可欠やと思うんですがね。それがうちにはおらんっちゅうか、リーダーシップに欠けるわけですわ(地区O)」

◆アクション事業逃避型の委員長のコメント

「(アクション事業申請に対して)あえて僕は発言しなかったんです。僕が提案しても良かったんですけどね(地区Ｐ)」

「私があんまり取り組む意欲がなかった(地区Q)」

『目標多様型』

地区A、地区Bはいずれも 40 代の若い推進委員長であるが、地区Aの委員長の発言、「最初は重荷でしたね。20 万もらってもやるのがねぇ。そもそも第 4 次発展計画っていうのは本来なら行政がやる仕事じゃないですか。そのときは各区長を集めてこういうことをやりたいのでご協力をお願いしますっていう話があったんですよ。でも、それはおかしいでしょ、それは行政がどういうふうにやるかってことを決めるべきで住民にこういう事をしますよっていう大枠を行政が決めてその中でいろいろ集落の中でどういうふうにする勝手ことを決めるべきじゃないのっていう話は出たんですけども、最終的には地区Aの場合はこれをやることによって独自性っていうかどう踏み出していこうかってことがあって、どうしても区の入り口に大きな看板一戸にしても 20 万の補助の中でやりましたので、最初はそんな大きな看板立てて区のためになんになんのやいうて総会ではお金は出せなかったと思うので区のお金じゃないしそういうことができるしって言うことですよね。(地区A)」からも分かるように、地区推進委員長が地区計画に対する必然性を認識し、区民が一丸となって取り組む姿勢ができている。新たに立ち上げた地区推進委員会の委員は引き続き推進委員長が取り組み、積極性を持って活動している。

地区Bは若い人に委員長をということでTさんを地区推進委員長にと、区民の総意で決定した。「最初は嫌々だった(中略)結局自分達でしか守れないと思って」とまちづくりに対して理解を示し、取り組んだ。小さな地区であり、一つ一つの行事に人員的、財政的負担が大きくかかるため、ふれあい祭りには参加しないなど自分達で取り組めることに照準を絞ってひとつずつこなしていく方法を取り入れた。全戸に役員を当てた地区推進委員会を発足させた。

『目標単発型』

地区Dは 11 年度区長である。地区計画策定後、新しく 3 つの小委員会(道路委員会、財産区管理委員会、名水の里保存委員会)を立ち上げたものの、推進委員長は委員会には入らなかった。これは自分は区の役員として委員長をしていただけであって、任務期間が終われば一般区民と同様であるという認識から起こった行動だと考えられる。

地区Cは委員長のリーダーシップに区民がついてきているパターンで、委員長のコメントとして「僕が動かないと誰も動いてくれないんでね。」など、まちづくりの組織化がうまくいっていない状況であることがわかる。

『目標達成型Ａ』

いずれの地区も区の役員が委員長になったパターン。両地区とも、地区のシンボルがはっきりしていたので区民のアイデンティティ統一はしやすかったものと思われるが、事業終了後にいずれの委員会も解散してしまっていて(地区Ｆは旧待ちづくり委員会が形骸化したかたちで残っているが)「記憶に残った(地区Ｆ)」「楽しかったですわね。新しい動きに発展させたいとは思うてるんや(地区Ｅ)」と、後に続く動き全く起こらなかった。これは委員長が地区計画は 2 年間の期間限定作業だったという認識が強かったためであると考えられる。そのため、現時点で両地区に待ちづくりに対する具体的な動きはない。

『目標達成型Ｂ』

区長、代理区長が委員長になっているという共通点を持つ。

地区Ｇ地区推進委員長は「アクション事業は正直負担でしたね。区だけでは動けない問題だってあるでしょう。いろいろ意見は出たんですよ。姉川を利用して流れるプールを作りたいとか、混戦を利用した風呂の拡大とか。」と、どうしてもハード整備に意識が傾いてしまっている。また、「リーダーがおらん」と、これからの活動にリーダーとしての役割を果たす気持ちが薄い姿勢も見えた。

地区Ｉ地区は委員長孤立タイプに近く、中間報告でも「委員の人選に問題はなかったか」と不満を漏らしていた。今後の展望としては「これからもう一回推進主体を立て直そうと思ってね。中心になる人はこれから探して育てていかないかんなってことでね(地区Ｉ)」と語り、新しい展開を望んでいる状況である。

地区Ｈでは当時代理区長だったＫさんによると委員長に選ばれた経緯を「その日(説明会の日)はね、ぼくがたまたまその会合に出席したんですよ。そしたら知らんうちに委員長に選ばれてたんですよ。そんでしょうがなしにね。」と語り、委員長としては「町が予算があるしこういうことをやったらどうやという風なことを言ってくれたらいつでものせていただきたいなと思うんですよ。」と将来展望と結んだ。この発言から委員長本人がまちづくりをハード整備ととらえている傾向が強く、自主性が育つには至らなかったことが分かる。

『委員長孤立型』

地区Ｊは区長の指名、地区Ｋは協議から委員長を選出した。地区Ｊは平成 11 年度区長が以前に区長経験のある高木さんに依頼した。しかし、イベントを全く行わず、総会も年に 1 度の地区Ｊは縦割り、横割りのまとまりがうまくいかず、委員長が孤立するに至った。

地区Ｋの場合、事実上の推進委員長と名簿上の推進委員長が異なる。地区が小さいので役員の選出が困難で、役員を兼務することが難しいためである。仕事をもっている 40 代の瀧上さんは外部に仕事をもっているため、地区Ｋのお寺の住職でもあるＦ氏に変わった。Ｆさんは委員長指名に対するいきさつを

戸数が少ない上に公の仕事ができる人間が少ない。その中から選んでいかないかんからどうしても制約があってね。そんな中で地区推進委員長を選ばないかんてことでね。委員ばかり続いているというものもいて、そういう人は外さないかんっていうこともあってね。結局まあ、その町づくりの委員長が、まちづくりの話が出てきたのが圃場整備の話があったずっと後だったから、圃場整備の関係の方に主として力のある人がいっている。だから結局若い手の空いている人っていうことでそこへ落ちついたわけですね。彼には非常に気の毒な話なんです。(地区K)

と語った。前述のように地区が前向きな展開をするには難しい時期だったということもあり、F さんが個人で立て看板を作るなどの取り組みを続けている状況である。

以上から地区推進委員長にどのような人が就任するかは、地区のまちづくりに対する取り組みの姿勢を左右する、ひとつの大切な要素であることがわかった。また、地区推進委員長に最も適している条件は、地区外での活動経験をもつ若手の人であることが分かった。さらに特筆すべきこととしては、まちづくりへの取り組みの初歩段階の地区において、区役員ではない人が委員長に就任することは、本人の力量に関わらずなかなか困難なことである。これは、区民のまちづくりに対する理解や、地区推進委員長に対する信頼感は時間をかけて根付かせていくものであるからである。よって、始めのうちは区長の諮問機関として位置付ける、もしくは区長込みの推進委員会をつくり、ある程度根付いた後で、推進機関を独立させるなどの段階を踏む必要があると考える。

4－3－3　地区推進委員からの考察

どのような地区推進委員選出方法が適しているかを分析、考察する。前項で委員長を扱ったため、本項で人数を扱っている数値は、委員長を除く委員の要素で出している。

①　選出方法

区長が委員長になっている地区に関しては選出方法の分類を「委員長の指名」とした。

全体的に区長指名、委員長指名が多く、グループごとの違いも特になかったが、目標多様型（グループ 6）は委員長指名方法と同様、協議で選ばれている地区が多い。目標単

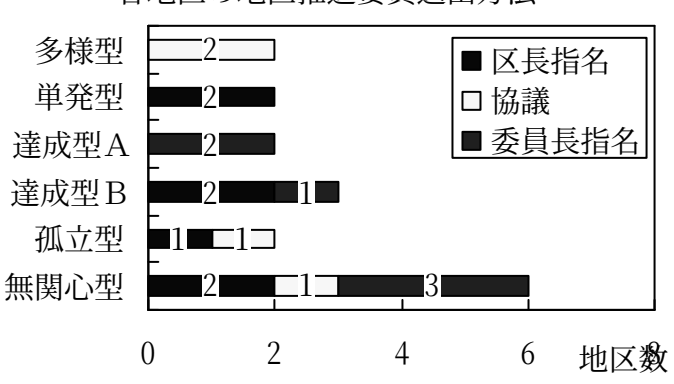

図 4-9　地区推進委員選出方法

発(グループ 5)はいずれも区長指名型である。これは、区長は日頃から区全体を意識して見ている人であり、どのような人材が眠っているかを一般区民よりも把握しやすいためだと考えられる。逆に、委員長指名は、自分の日頃から親しい人を集めてしまいがちなので、考えが偏ってしまうことが多くなってしまう。そのため、一見団結力がありそうに見える委員長指名は発展的なまちづくり組織になりにくいと考えられる。

②年代別

全地区の委員人数は 9 人から16人で基本的に30代から 70 代が全体の委員で多くの割合を占め、ステップが上がるごとに 40 代の占める率が高くなっていることがわかる。

高齢化が進んでいて、人口の少ない地区には世代交代が見られる地区A、地区Bのようなグループと、地区Mのような 80 代までが委員として参加している地区もある。世代交代を受け入れる体制の有無よって同じ大きさの地区でも大きな違いが現れているといえる。

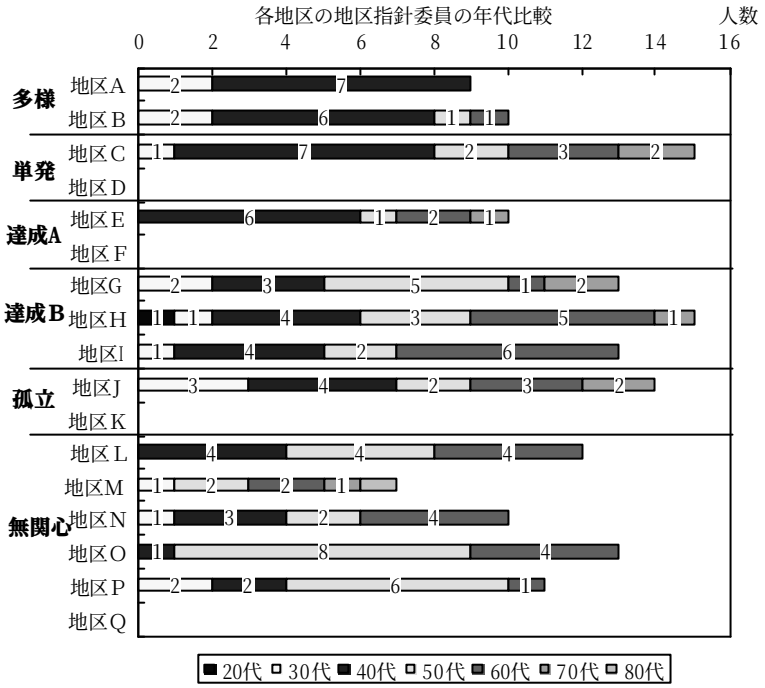

図 4-10　各地区の地区推進委員の年代比較

また、大きな地区(地区O、地区Ｉ、伊吹)は若手が地区には多くいるにもかかわらず、60 歳以上が占める割合が高い。このような地区は区政も仕事を退職した人で占められていると予想される。これらの地区からは「老人が幅を利かせすぎている(地区O)」などというアンケート結果も出ていて、若者の人材を埋もれさせてしまう改善すべき習慣だと言えるだろう。

③男女比

地区推進委員に女性をなるべく入れるようにとの行政の指導により、地区M、地区K、地区Dを除いては各地域女性を多いところで、4 人の女性が委員として参画している。女性は全て 30 代から 40 代で、おもに婦人会からの選出である。50 歳以上の女性がいない理由を、生活改善(古いしきたりを改善しようという動き)の話の中で、地区Aの委員長にお話

いただいたコメントから推測すると、高齢の女性には区政に口を出すことが暗黙の了解としてはばかられている現状がまだまだ残っていると考えられる。

「今までの区長さんも60とか70歳の人だったんで、奥さんも長いこと住んでおられる方達で、そういうもんなんやと、心の中は分かりませんけども、今までの式大量、役員の奥さんはそれ(男性達の酒宴後後の片付けなど)をこなしてきてくれてて(そのような習慣に対しての意見が)あまり表に出るようなことじゃなかったんですけど、若い人間が入ることによって、こういうことはおかしいんじゃないのって言うことで、じゃあ、それは変えていきましょうかということで」(地区A)

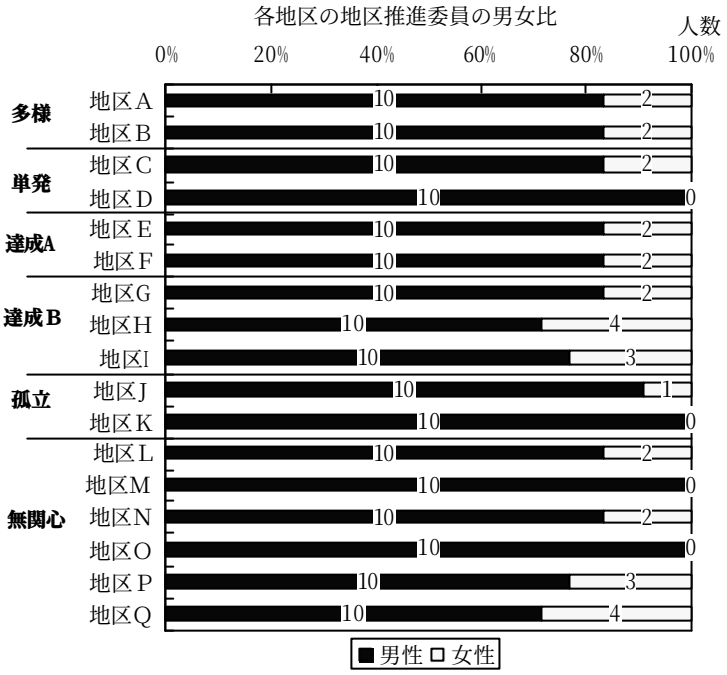

図 4-11　各地区の地区推進委員の男女比

また、女性の参画がなかった地区M、地区Kは、高齢化が進んでいる小さな区であるため、若い女性が少なく、結果、女性の参画がなかったものと推測される。

今まで女性が区の動きに参加しにくかった理由のひとつには、地区の総会への参加規約が考えられる。ほとんどの地区の総会出席は一戸一人という決まりがあり、男性が一家の代表として区政に携わってきた。そのため婦人会としての要望を申請する以外に女性が区の決定事項に参加することは、滅多になかったという地域自治の背景が、女性参画を拒んできたといえよう。

しかし、このたび初めて区政に女性が参画した地区Aでは、女性参画による変化を以下のように認識しているという。

「女の人の意見って言うのは区だけじゃなくて、今度五色の滝に行こうかって行ってくれている長浜の方に集落があるんで、婦人会にお願いしようとか、委員さんの奥さんに猪汁

を作ってもらおうかとか、そういう話もあるんで。そういうことは男性にはできないですし、毎回毎回若い人に負担をかけるのも大変ですので、だんだん簡素化していこうかと。で、もっと地区ＡをＰＲしなくてはいけないっていうのと、私たちができる仕事はこれだけよって言うのとの接点がどこら辺になるかっていうそういうことでいろんな話をする機会は増えていってますよね。」

上述のように、女性はまちづくりの実務的な部分でも男性にはできない働きをすることができ、また、お嫁に来て間もない女性は、外部からの来訪者としての地区の長所、短所が見える貴重な人材である。そういった意味でも女性をまちづくりメンバーとして入れることは必要な要素であると考えられる。

以上より、地区推進委員は協議、それが難しければ区長の指名で進め、若手及び女性を盛り込んだ組織にすることが望ましい。委員を固定するのではなく、取り組み内容およびマンネリ化などの問題などに合わせて、委員の構成を変えたり、段階に応じて、ふさわしい人を募集したりするのもよいと思われる。また、今回のヒアリングでは聞き出せなかったが、主婦の人でも参加しやすいような会議の持ち方(土日の昼など)を工夫することも必要であろう。

4−3−4 まちづくりの進め方の要因からの考察

各地区へのヒアリングおよび議事録の分析より推進会議数、ワークショップ数およびワークショップ内容、実施形態を回数を把握することで分析した。

① 推進会議とワークショップ数比較およびワークショップ内容

平成 11-12 年度の 2 年間に行われたワークショップをヒアリングおよび議事録からワークショップ回数および、ワークショップ内容を明らかにし、単純集計をした上でグループごとに考察を行った。

『目標多様型』

ワークショップ数はいずれの地区も 4〜5 回と、数値上はさほど多くない。

地区Ａは地区内視察に力を入れている。

地区Ｂは勉強会 1 回、地区外視察 4 回と、地区外視察に力を入れている。また、推進会議数が他のグループよりも少ないのは総会が月に一度あり、まちづくりに関する話し合いは総会で話し合われることが多かったためである。

『目標単発型』

地区Ｃは 3 回、地区Ｄは 10 回のワークショップを行っている。地区Ｃは平成 11 年度、12 年度の合計を表しているため総数が 3 回だが、桜、梅の植林、ツツジの植林、染物祭りなど平成 13 年度にもワークショップを多く行っている。

地区Ｄは、地区外視察に 2 回、また、アクション事業で名水フェスティバルを行うと決めてからは担当グループに分かれ、グループワークをそれぞれのグループが 8 回ずつ行っている。

『目標達成型Ａ』

いずれの地区もワークショップを多く取り入れている。

地区Ｆは石仏についての勉強会を 4 回行い、ふれあい祭りの準備を 2 回行った。

地区Ｅは地区外視察に 2 回、財産区である山の見学に 1 回、地区Ｅ側沿いの整備を 1 回行った。

『目標達成型Ｂ』

推進会議数は地区Ｈを除いて、比較的回数は少ないと言える。また、地区Ｉのワークショップ割合が多いものの、その他の地区は 0〜1 回である。

地区Ｈは先進地に 1 度視察に行っているが、その他の活動はない。

地区Ｉ地区は地区外視察および、地区にある地区Ｉ勝居神社についての勉強会を前半につき 1 回のペースで行っている。参加対象は推進委員のみ。

『委員長孤立型』

推進会議数は少なく、ワークショップも各地区 1 回のみ開催している。いずれも先進地視察である。

『委員長無関心型』

地区Ｌ、地区Ｑは推進会議数が比較的多く、一方、その他 3 地区は比較的会議数、ワークショップ数ともに少ない。また、地区Ｏ、地区Ｎのワークショップ回数が多いのは、各年齢層、各種団体との協議会を行ったためであり、委員長無関心型は総じて会議数、ワークショップ数が少ないことが分かる。

協議会をおこなった地区Ｏの場合、65 歳以上で 2 回開催した以外は 35～50 歳、51～64 歳以上の協議会は 1 回、18 歳～35 歳は参加者がなかったため 0 回だった。

一方、地区Ｎの場合は各種団体とのワークショップを 4 回取り入れた。協議会対象は老人クラブ、婦人会、消防班、農業改良組合、観光開発委員会(伊吹山の観光委員会)でそれぞれ 1 回ずつである。これも、回数を重ねることなく、要望を聞いただけにとどまり、発展的な会議をするには至らなかったと予想される。さらに地区Ｎは先進地見学 2 回実施している。

地区Ｌは 3 回地区外視察に行っているが、その他の活動はない。

地区Ｍ、地区Ｐはワークショップを行わなかった。

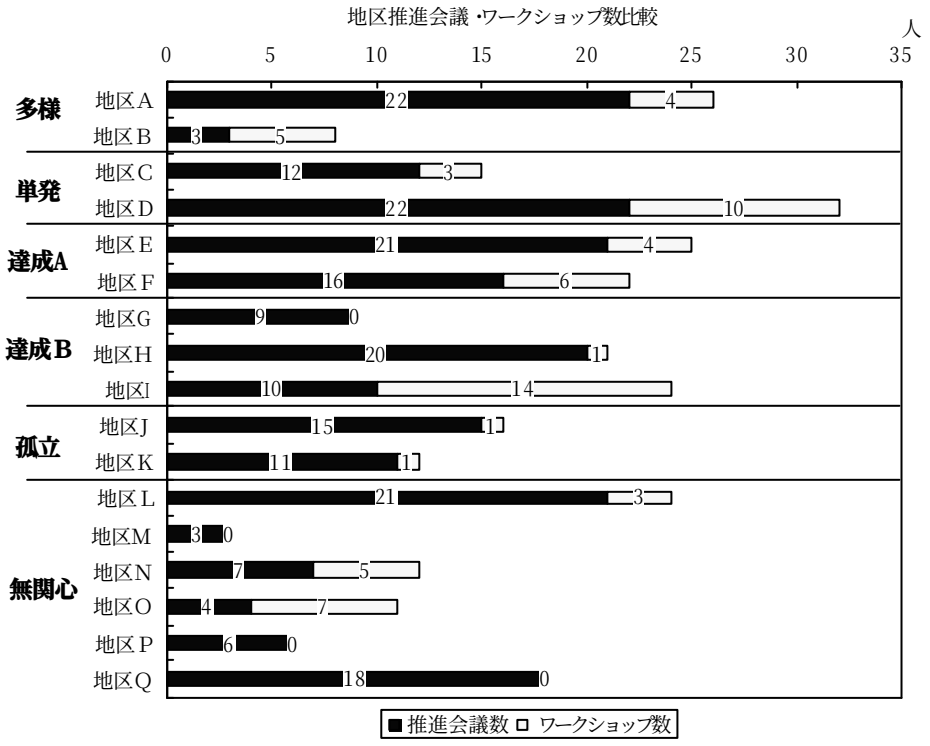

図 4-12　推進会議数とワークショップ数比較表(平成 11-12 年度合計)

表 4-3 各地区のワークショップ内容の概要(平成 11-12 年度合計)

グループ名	地区名	地区内視察および地区内作業	地区外視察	講演会 勉強会	協議会	合計
目標多様型	地区A	5	0	1	0	6
	地区B	0	4	1	0	5
目標単発型	地区C	1	1	1	0	3
	地区D	8	2	0	0	10
目標達成型A	地区E	2	2	0	0	4
	地区F	2	0	4	0	6
目標達成型B	地区G	0	0	0	0	0
	地区H	0	1	0	0	1
	地区I	0	5	9	0	14
委員長孤立型	地区J	0	1	0	0	1
	地区K	0	1	0	0	1
委員長無関型	地区L	0	3	0	0	3
	地区M	0	0	0	0	0
	地区N	0	0	0	5	5
	地区O	0	2	0	4	6
	地区P	0	0	0	0	0
	地区Q	0	0	0	0	0

② ワークショップ実施形態

同じく、ヒアリングおよび議事録よりワークショップへの参加主体を明らかにし、グループごとに考察を行った。

『目標多様型』

地区Aは作業・地区内視察（五色の滝周辺の整備、五色の滝見学×２回）および講演会を区民の参加を促して実施、ふれあい祭り準備は１年目は婦人会の協力を得て、2 年目は若手男性を集めて協力をしてもらった。

地区Bは先進地視察を 4 回、勉強会を 1 回行い、先進地視察は区民と共に実施、推進委員対象の講師学習を１度行った。

『目標単発型』

地区Dはフェスティバルに向けて分かれたグループごとのワークショップが各団体ごと 8 回ずつと、毎年参加している「全国水環境保全市町村連絡協議会全国大会及び全国名水シンポジウム」に名水保存委員会の委員が H11 年度、12 年度に参加。名水を持つ別の地域の管理方法などを見学に行った。

地区Cは先進地視察、講習会（染色講習）、作業(刈安採取)を地区推進委員で行った。戦術のように、11 年度、12 年度のデータであるが、その後刈安で染色の祭り、桜やツツジの植樹を区民総出で行うなどの取り組み実施した。

『目標達成型A』

地区Eは地区外視察には地区推進委員及び区民が参加し、財産区視察およびE川沿いにアジサイを植えたり、ベンチを作ったりする作業は子どもも一緒になって行った。

地区Ｆの勉強会は講師を招いて、一般区民とともに地区の歴史について学んだ。そして、2 回ほど､ふれあい祭り出展のため地区推進委員会だけで集まった。

『目標達成型Ｂ』

地区Ｈは地区推進委員と区の役員で先進地の視察に行った。

地区Ｉは全 9 回の勉強会には地区推進委員および区の役員が参加し、全部で 5 回の先進地視察には老人会、婦人会、温故創新委員会などの各種団体と共に行った。

『委員長孤立型』

地区Ｊ、Ｋいずれの地区も１度の先進地視察には、地区推進委員が区民と共に見学に行った。

『委員長無関心型』

一般区民に参加を呼びかけた地区は地区Ｌと地区Ｏしかない。また、地区Ｏ、地区Ｎは団体との協議回数が圧倒的に多い。

表 4-4　各地区のワークショップ実施形態

		ま員+区民	ま員+区員	ま員+区員+講師	ま員+区員+区民	ま員+区員+区民+非権	ま員+区員+区民+講師	ま員+区員+団体	団体	合計
目標多様型	地区Ａ	2	0	0	2	0	1	1	0	6
	地区Ｂ	0	1	1	2	0	1	0	0	5
目標単発型	地区Ｃ	0	2	1	0	0	0	0	0	3
	地区Ｄ	0	0	0	0	0	0	0	10	10
目標達成型A	地区Ｅ	2	0	0	0	2	0	0	0	4
	地区Ｆ	0	2	0		0	4	0	0	6
目標提案型B	地区Ｇ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	地区Ｈ	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	地区Ｉ	0	1	9	0	0	0	4	0	14
委員長孤立型	地区Ｊ	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	地区Ｋ	0	0	0	1	0	0	0	0	1
委員長無関型	地区Ｌ	2	1	0	0	0	0	0	0	3
	地区Ｍ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	地区Ｎ	0	0	0	0	0	0	5	0	5
	地区Ｏ	0	1	0	0	0	0	5	0	6
	地区Ｐ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	地区Ｑ	0	0	0	0	0	0	0	0	0

以上より、17 地区中 13 地区がワークショップに取り組んでいるが、取り組み内容および実施形態によってステップ達成状況が異なることが分かった。

ワークショップ内容においては、地区内視察および地区内作業を取り入れている地区、または講演会・勉強会を取り入れている地区のステップ達成状況が高いことがわかる（表 4-4)。先進地視察はワークショップを取り入れているほとんどの地区が実施していて、参考にしている。それももちろん具体事例を参考にするに当たって効果を発揮する。しかし、他事例ばかり見ていても自分の住む地区のいいところを見つけることはできない。目標達成型Ａから目標多様型の地区とそこまでステップが進んでいない地区との違いは自分の地

区を見つめる機会を持ったかどうかである。また、講演会・勉強会も、自分の住む地区の歴史や自然環境の特有性を講義してもらうことで、自分達の住む地域のシンボルがどのような特性をもっているのかが明らかになってくるのである。

　また、推進主体においては区民を巻き込んだ協働型のワークショップを実施している地区がステップの達成状況が高いことがわかった(表 4-4)。最もワークショップを行っている地区Ｉが区民の理解を得られずにステップアップできなかったのは、勉強会やワークショップに参加するのが推進委員や団体のみに限っているからであると推測できる。地区Ｄがフェスティバルに関して協議の中でアイディアを求めた際のコメントからも分かるように、委員ばかりが勉強会をしたり、先進地に視察に行っても、区民からは不透明で同調しかねるという風にとられてしまいがちだと考えられる。

「やっぱし上から「老人会さん、なになにしてくださいよ」「婦人会さん、ないなにしてくださいよ」という押し付けじゃなくして、任意団体の方のアイディアを取り入れていくようにしたら、来てくれるようになりましたね。上からの押し付けですと、「これはどうしたらええんやろとかねえ」っていちいちあれ(やり方)を聞いてくるんですね。でも自由にすると、こっちが考えもしなかったアイディアを持ってきてくれて、どんどん広がっていって話を聞いてみるとそうやって会議を開いて生き生きとしてフェスティバルの話し合いをしたりしてたそうで、充実した、楽しいときを過ごさせてもろた言うてお世辞かも知れんけどそういうてくれた人もいました。」(地区Ｄ)

4−3−5 アンケート資料からの考察

今回の地区計画を進めるにおいてアンケートを実施した地区が 17 地区中 15 地区あった。本項ではアンケートの設問内容についての分析をおこなう。

① アンケートの利用状況

表 4-5 よりグループ 1『委員長無関心型』以外の地区では地区計画を進めるにあたってアンケートを取り入れていることが分かる。

地区単位で取っていることから回収率は全て 75%を超えている。平成 9 年にアンケートをとっている地区Hは第3次総合発展計画立案時に地区内で取ったアンケートを第4次総合発展計画における地区計画作成に利用したものである。

表 4-5 伊吹町各地区アンケート状況

グループ名	地区名	実施状況	入手状況	配布年度	回収率	対象
目標多様型	地区A	○	○	H11	95.70%	高校生以上
	地区B	○	○	H11	記載なし	一戸に1枚
目標単発型	地区C	○	○	H11	96%	中学生以上
	地区D	○	×	H11		
目標達成型A	地区E	○	○	H11	80.76%	小5以上
	地区F	○	○	H11	80.13%	?
目標達成型B	地区G	○	○	H11	記載なし	一戸に1枚
	地区H	○	○	H9	87.30%	小学生以上
	地区I	○	○	H11	89.50%	15歳以上
委員長孤立型	地区J	○	○	H11	75%	高校生以上
	地区K	○	○	H11	75.60%	20歳以上
委員長無関心型	地区L	○	×	H11		
	地区M	×				
	地区N	○	○	H11	記載なし	小3～中3
	地区O	○	×	H11		
	地区P	×				
	地区Q	○	○	H11	記載なし	各戸2部

② アンケート対象

入手できたアンケートの対象者は右のとおりである(図 4-14)。

配布方法としては①「対象者を絞って該当者全員配布し、回答してもらうタイプ」②「家ごとに枚数を決めて家人代表者に回答してもらうタイプ」の２種類である。

ステップ達成が高い地区は対象者を大きく設定し、該当者全員に配布しているパターンが多い。

各戸に 1 枚配布している地区Gを例にとって、伊吹町平成 11 年の住民基本台帳に記載されている年齢別の人口比率と対比して見ると 20 代男性、30 代女性が 0 人であること以外にも、40 代女性の多さ、が多く、20 代、30 代の回

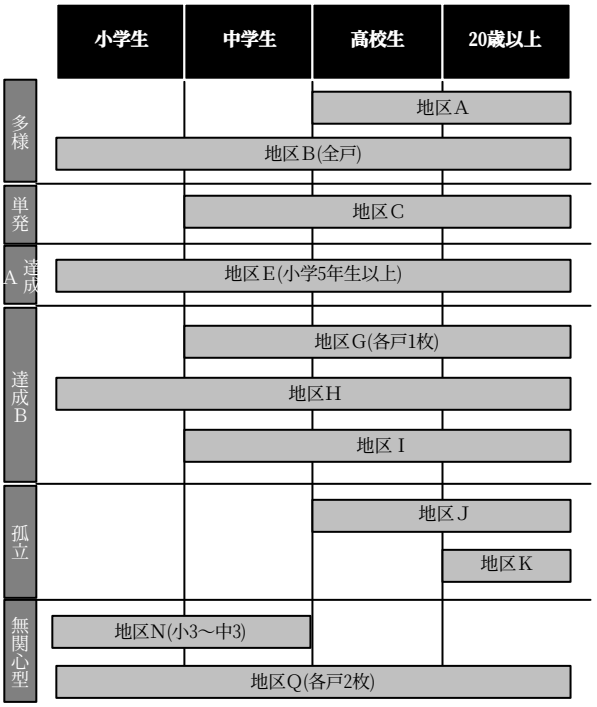

図 4-13 各地区のアンケート対象

答者数が比率的に少ない。この配布方法は外に出て働いている年齢層からの回答を得にくく、逆に主婦をして比較的時間を持っている主婦層の回答を得やすい配布方法であることが分かる。よって、さまざまな立場の人から見た現住地区に対する回答を得ようとする地区計画アンケートに、この方法は適していないことが分かった。

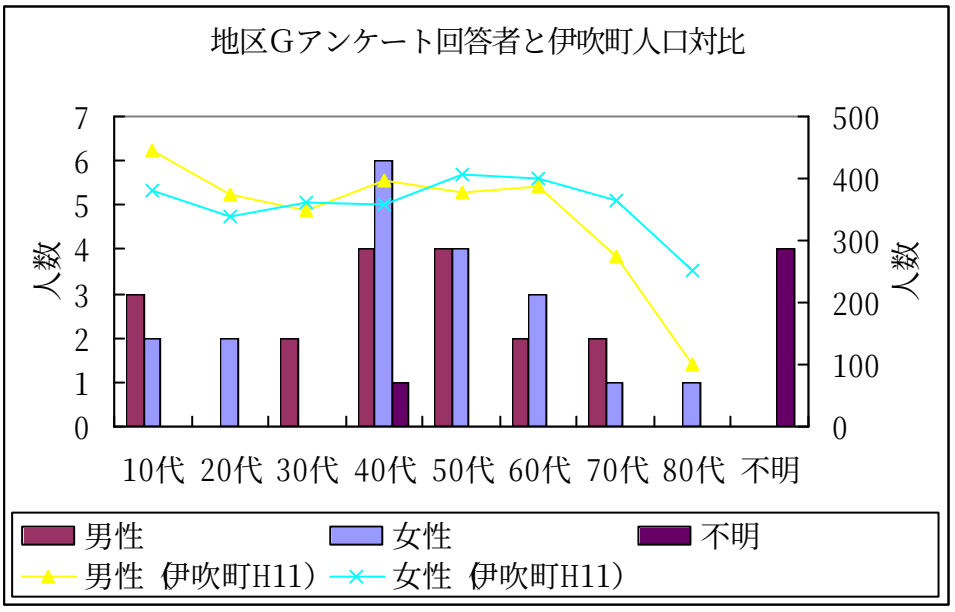

図 4-14 一戸に一枚ずつに配布した地区(地区Gを例として)の
アンケート回答者割合と伊吹町人口対比表（平成 11 年度人口から）

③ 設問項目数および設問内容分析

アンケート項目を①具体的か、抽象的か②現状か、将来像か③把握か、提案かの 3 つの軸で分別した。

【「具体的 将来 把握」に関する設問［6 つ］】

地区の具体的な事象（シンボルや問題点、区民の意識など）に対して区民が将来どのようにしていきたいと考えているかを把握するための設問

《例》 ・姉川ダムについて<選択式>(地区Ａ)

・文化財(石仏･桂の木)の活用をどの要因考えることが大切か<選択式>(地区Ｆ)

・若い人が住みやすい地域にするにはどうすればよいか<選択式>(地区Ｊ)

など

【「具体的 現状 把握」に関する設問［72 つ］】

地区の具体的な事象（シンボルや問題点、区民の意識など）の現状を把握するための設問

《例》　・老後の生活をどのように考えているか<選択式>（地区Ｃ）
・地区Ｃに昔からの伝説があれば教えてください<自由回答>(地区Ｃ)
・地区Ｈの好きなところを教えてください<自由回答>(地区Ｈ)　　など

【「具体的 現状 提案」に関する設問［0 つ］】

地区の具体的な事象（シンボルや問題点、区民の意識など）の現状を提案するための設問

【「具体的 将来 提案」に関する設問［19 つ］】

地区の具体的な事象（シンボルや問題点、区民の意識など）を区民が将来どのようにしていきたいと思っているかを把握するための設問

《例》　・老後生活を豊かにするために必要だと思うこと<自由回答>（地区Ｊ）
・生涯学習で学びたいこと<自由回答>（地区Ｊ）
・地区Ｅ区内にほしい施設や設備として何がありますか<自由回答>（地区Ｅ）
・地区Ｉにおけるふれあい活動でどのようなどんな行事をしてほしいか
<自由回答>（地区Ｉ）

【「抽象的 現状 把握」に関する設問［11 つ］】

抽象的な事象に対して区民が現在どのように思っているかを把握するための設問

《例》　・住んでいるところに愛着があるか（地区Ｆ）
・今住んでいる地区Ｅをどのように思いますか<選択式>（地区Ｅ）
・地区Ｉの印象<選択式>（地区Ｉ）

【「抽象的 現状 提案」に関する設問［0 つ］】

抽象的な事象に対して区民が現在どのように思っているか提案してもらうための設問

【「抽象的 将来 把握」に関する設問［4 つ］】

抽象的な事象に対して区民がどのようにしていきたいと思っているかを把握するための設問

《例》　・まちづくりで重点的にしたいこと<選択式>（地区Ａ）
・住みやすい村にするために必要なこと<選択式>（地区Ｋ）

【「抽象的 将来 提案」に関する設問［9 つ］】

抽象的な事象に対して区民がどのようにしていきたいと思っているかを提案してもらうための設問

《例》　・地区Ｃで将来性のある PR 点は<自由回答>（地区Ｃ）

・地区Nに対する希望や夢（地区N）
・私たちの村のこれからについて意見をお書きください（地区Q）

【その他】

フェイス質問・・・・・・・・回答者の属性を把握するための質問（年齢、性別、職業など）
自由・・・・・・・・・・・・・・・回答内容を指定せずに意見を尋ねる質問。（地区G、地区B）
参加意識・・・・・・・・・・・地区のまちづくりに参加する気持ちがあるかどうかを尋ねる質問（地区J）
先進地視察希望地・・・先進地視察先の提案を求める回答（地区J）
主体・・・・・・・・・・・・・・・まちづくりの主体がどうあるべきかを尋ねる質問（地区J、地区I）

Ⅰ.具体的・抽象的設問比較

ステップ別の傾向は出なかったが、「ひとのよさ」をテーマに取り上げている地区Cだけ、他の地区比べて圧倒的に具体的質問が少ない。他の地区は具体的になにをすべきかを区民に直接聞くことで、質問する側は区民の意識を把握しようとしている。

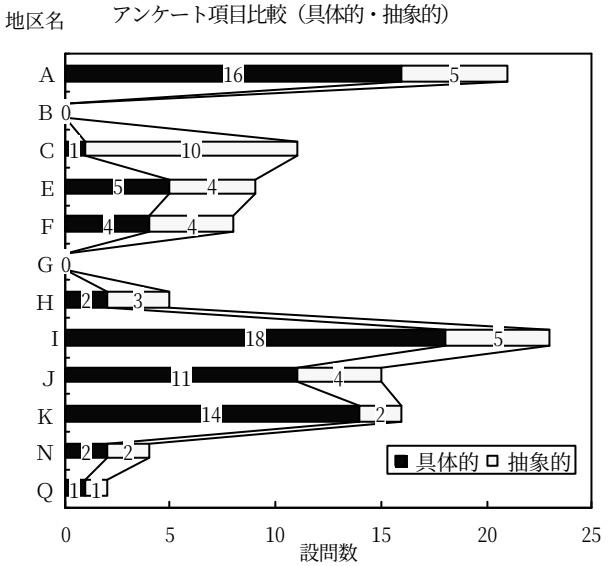

図 4-15 アンケート項目分析(具体 ･抽象)

Ⅱ.把握・提案の設問数比較

ステップが高い地区ほど把握の割合が高い。これは回答者に今の思いを項目から把握させておいて後に提案させるという流れをもったアンケート方式である。この手法をとることによって、地区に対するさまざまな思いをめぐらせながら最後に特筆したいことを書くことができ、突然提案を書かせるよりも、視野の広い回答を得ることができたと予想できる。

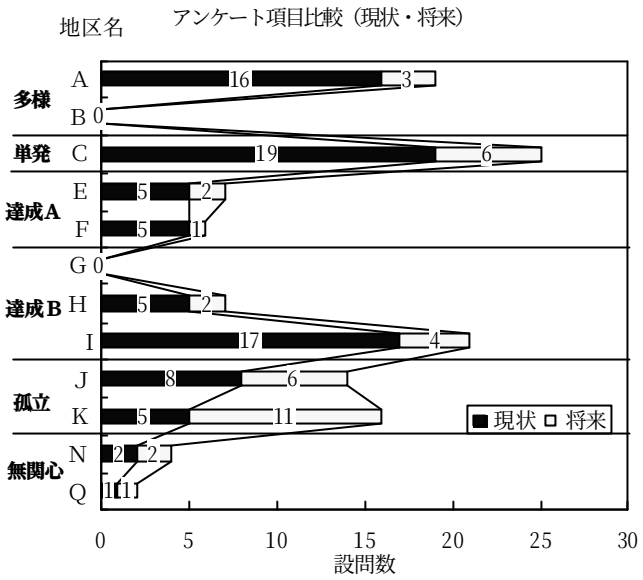

図 4-16　アンケート項目分析(把握 -提案)

Ⅲ.現状・将来の設問数比較

ステップの高い地区は前半に現状に関する質問を列挙し、後半に将来に関する質問を行っている。このような流れでアンケートを進めることによって地区のおかれた現状、自分の地区に対する意識の現状を認識した後、どのような地区にしていきたいかを答えることができ、より現実味を帯びた将来に対する思いが明確になると予想される。

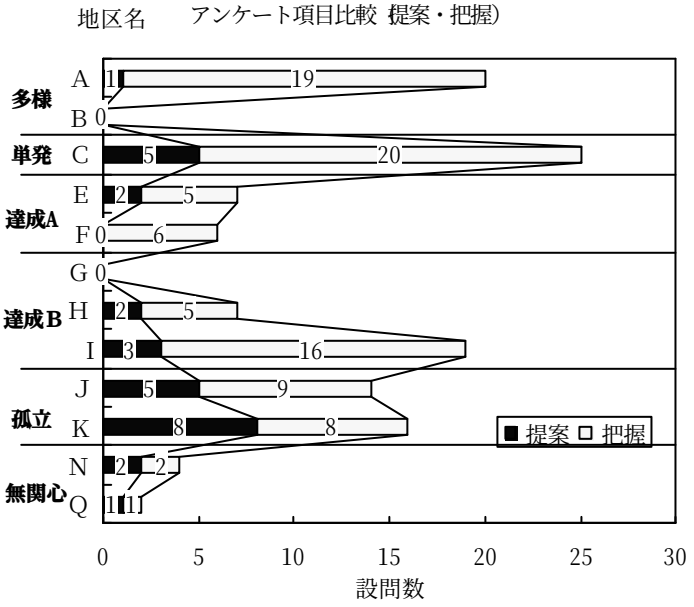

図 4-17　アンケート項目分析(提案 -把握)

以上、アンケート項目を分析をした結果、前半に現在の地区に対する思いを引き出す設問を設け、その後で将来に対する思いを提案させるアンケートがより効果的であることがわかった。しかし、アンケートで得られた回答がどこまで活用されているかは明らかでないため、アンケートの活用方法も把握する必要があるだろう。

4－3－6 時間軸からの考察および地区の詳細要因からの考察

ヒアリングおよび議事録から、平成 11-12 年度の各地区の地区計画への取り組みを、時間軸で図に表し、分析した。また、各地区の詳細な状況をふまえて取り組みの分析をおこなった。

Ⅰ.目標多様型まちづくり

1 年目が会議重視型、2 年目がワークショップ及び推進会議を重視して進めている。地区Aは 12 年度のワークショップと同時に推進会議も終わってしまっているが、地区推進委員長がそのまま、13 年度発足の地区推進委員会の委員長として残っているため 11 年度、12 年度の反省(see)ができていると考えられる。地区Bはワークショップ終了後にも総会でまちづくりについての反省会を行っている（議事録より)。よってこれらの地区は plan→do →see の流れが確立されているといえよう。

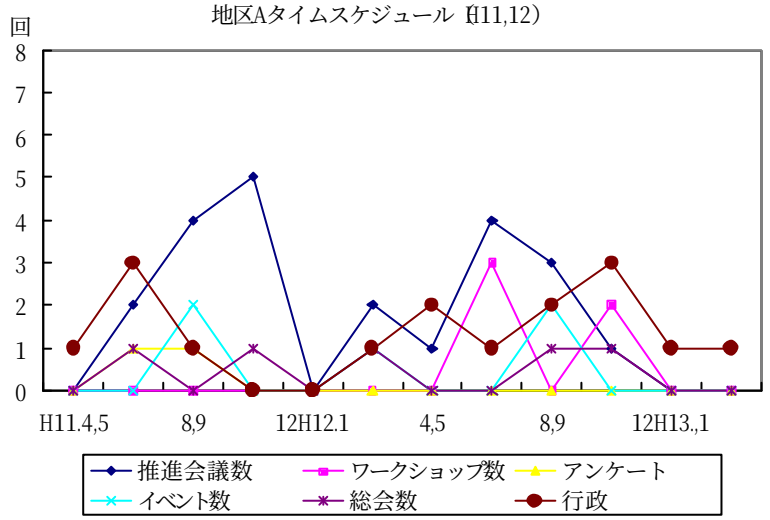

図 4-18 地区Aタイムスケジュール

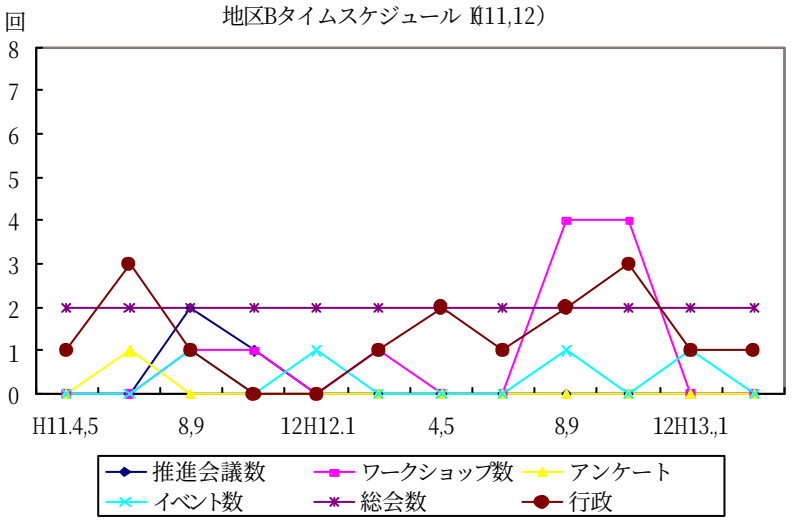

図 4-19 地区Bタイムスケジュール

【地区Ａのまちづくりへの取り組み】

姉川源流に位置する地区Ａは、アクション事業をきっかけに、エコツアーや、他府県の姉川流域在住の人々との交流を深めるなど、さまざまな取り組みを定着化させている。地区Ａ成功の背景には若手リーダーの存在、姉川の源流というシンボルの存在、そして、今までの町からの待遇が一転するのではという不安感が大きな要因となっている。ヒアリングの際、まちづくりへの取り組みのきっかけを「もともと地区Ａは姉川ダム(事業)があったんで公共工事させてもらう地元って言う意識が(行政側に)あって、あれも作ってくれ、これも作ってくれっていえばやってもらえてたりしたんですが(中略)もうできてしまったんで(中略)自分達から陳情するような動きに変わらなくてはならないしそういう状況にうちとこもやろうかっていうふうになっているんです」と地区の取り組みのきっかけを語ってくれた。伊吹町のみならず、湖北には多くの自然が残っている。そのような特色をもった地区や地域が連携して、まちづくりに取り組むことで、観光だけでなく、福祉や教育などさまざまな分野での連携が得られる可能性を秘めているといえるのではないだろうか。

図 4-20　エコツアー客に五色の滝を紹介

図 4-21　姉川下流域在住者と共同で記念植樹をおこなったときの風景

【地区Ｂのまちづくりへの取り組み】

地区Ｂは小さな地区であり、地区計画における話し合いもほとんど月に 1 回の総会で決めていき、アクション事業にはエントリーしなかった。「うちみたいなちっちゃな地区には経費、人員的負担が大きかったですからね。30 万円以上は出せないですよ。あれも結局お金がある地区がやってるでしょう。」と思ったという地区Ｂも、財政的、人員的ハンデを乗り越え、着々と自分達のペースでまちづくりを進めてきた。他の地区がアクション事業は単発的であると悲観視している中、地区の中にある史跡を整備しようということから議論を重ね、全戸に役員をあてた地区推進委員会を設立、アクション事業とは別枠で事業申請をして、国史跡としての承認をほぼ得た段階に達しているという。行政の理解を得ることができれば、継続的にまちづくりを勧めていくことも可能であることを証明している地区であるといえよう。

Ⅱ.目標単発型まちづくり

基本的に1年目は会議重視(plan)で、2年目はワークショップと会議(do&see)を行っているが、どちらの地区も12年度の秋以降活動をしていない。地区推進委員会は継続させたものの、新たな動きに向けての小休止のまま1年間経過してしまったグループである。

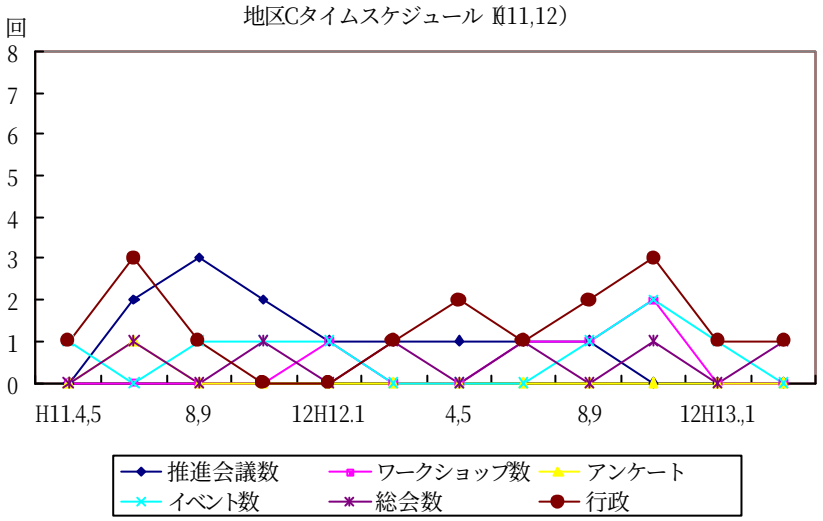

図 4-22 地区Cのタイムスケジュール

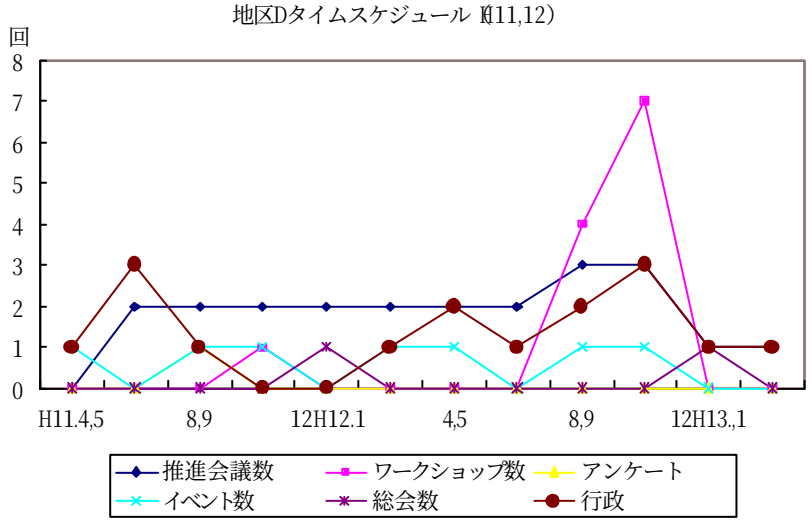

図 4-23 地区Dタイムスケジュール

【地区Ｃのまちづくりへの取り組み】

13 年度は 2 カ月に 1 回程度の活動状況である。ここで特筆すべきは地区Ｃではワークショップに参加しているのが地区推進委員だけであるということである。他事例からして、地区推進委員会だけでワークショップをしても、委員会が孤立してしまう傾向があるにもかかわらず、地区が一体となって、まちづくりに取り組むことができているのは、地区Ｃの人口が少なく、役員ができる人が限られている中での指名であるためである。選出方法も「87 人（H12.01.31）中の 30 人くらいがお年寄りで子どもさんが 10 人くらい。だから残りの 40 人、50 人の中で選ばれたんです」ということから 15 人の役員が選出されているため、男女合わせて 3 人に 1 人は役員である計算になる。そのため、家族の誰かが委員である確率は高く、その参画率がワークショップ参加者が少なくても区民からの反発が起こらず、俣強力をあおげた理由であると推測される。

また、地区Ｃは地区計画のねらいを「村の中の和、人づくり」と理解し、外部へのアピールを主としたまちづくりが多い中で、内部の充実に目を向けた特異な目標設定をおこなっている。このテーマは対象が曖昧であり、区民総出でやればいいという線でつないでしまうと、ともすれば事業自体が単発的なものになってしまいがちである。そのため、人の和作りには何が大切かきちんと話し合いをしながら、方向付けをしていく必要があるだろう。

【地区Ｄのまちづくりへの取り組み】

13 年度からは新しいまちづくり主体を作り変え、11、12 年度の地区推進委員長は主体から退いてしまった地区である。地区Ｄはもともと全区民が名水保存委員として名簿登録するほど、湧水がシンボルとして定着していたため、アクション事業で取り上げるテーマ設定が比較的容易な地区であったと考えられる。フェスティバルの協力主体としては、任意団体および口コミで広がっていた個人のボランティアに頼んだ。今までの上からの指示、指導ではなく、フェスティバル開催という初めての取り組みに対して、協力者それぞれが意見や情報を持ち寄って話し合いを進めていったという。

このフェスティバルは既存団体とボランティアグループが融合した推進主体によって進められた。今後の活動に対して「有志の方は毎年やってってくれっていうふうに言ってくれましたが、任意団体の方は毎年は勘弁してっていう話もありましたけど」と任意団体よりもボランティアの人のほうがまちづくりに対して積極的な意識を持ってくれたという。既存団体は義務感から参加している傾向が強いのに対して、ボランティアは自主的に集まった人々は主体性をもった活動しているという姿勢がうかがわれる。また、今回は扱わなかった地区Ｓも、既存団体ではなく、4 つのボランティア部会を新設してまちづくりを進めているそうだ。「老人クラブなんてのは事業が多いらしく。個人的には参加していただける方はおられますけど。婦人会も清掃とかは来てもらえますがね」というコメントからも、既存団体をまちづくりに取り込むのは難しいことが分かる。

また、シンボルを引き出すためのツールとしてフェスティバルを使ったことは人材探しに役立ったというが、アクション事業が単発的な事業だったため、来年度以降フェスティバルに補助がつくかどうか地区としては不安を抱えている。そのような現状を受けて「これからは目標を変えたのも必要かな」と委員長は今後の活動方針に対する思いを語っておられた。ひとつの事業にこだわらずにいくつかの選択肢を設けておくことが、継続的なまちづくりに繋がる道であるといえよう。

Ⅳ目標達成型Ａまちづくり

1年目は会議及び勉強会重視で2年目はワークショップを数回取り入れている傾向が強い。

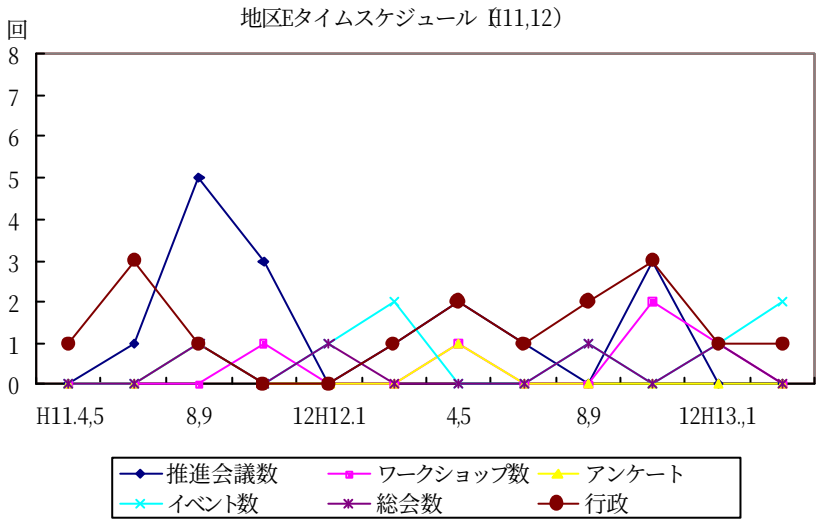

図 4-24 地区Eタイムスケジュール

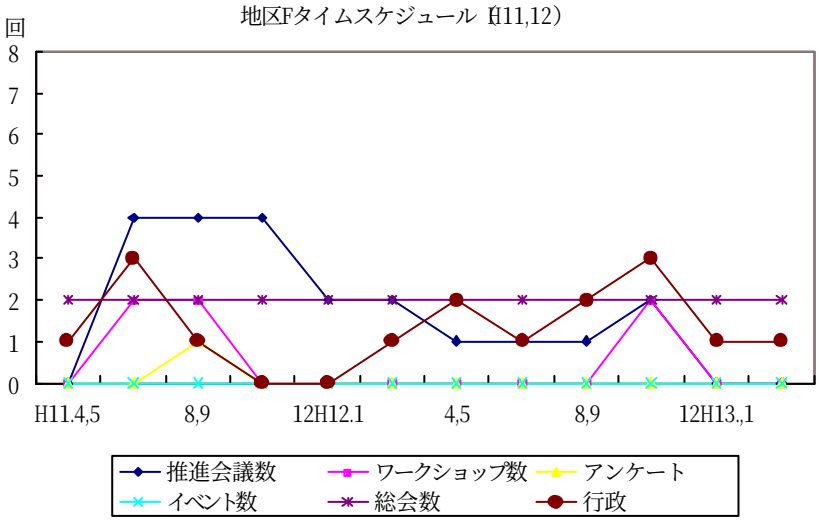

図 4-25 地区Ｆタイムスケジュール

【地区Ｅのまちづくりへの取り組み】

地区計画に対する活動がかなり活発な地区だと言える。始めに推進会議を多く設け、アンケートをとり、その動きの途中でワークショップを取り入れており、うまく会議とワークショップを使い分けている地区である。また、ワークショップ内容も地区の子ども達や府警を連れて地区の財産区である山を見に行ったり、アクション事業認定後には区民総出でＥ川沿いにアジサイを植えたり、ベンチを手作りするなどして、協働型のまちづくりを行った。推進委員長にアクション事業の印象を尋ねてみたところ「楽しかったですよ」と答えるなど、地区全体がまちづくりを楽しんで進めた様子が推測される。このように、円滑に会議や区民総出のワークショップが可能だったのは、若手男性が日頃から活発に活動しており、また、アンケート上での地区の良い点を自由回答で書く欄に「近所仲のよさ」が挙げられているなど、日常的に培ってきたコミュニティの円滑さが功を奏したといえよう。しかし、地区推進委員会を地区計画策定のための委員会と割り切ってしまったため、平成 12 年度にて委員会は解散してしまい、現時点でも新しい動きはないという。事実、アクション事業が単発的であるということは伊吹町地区計画の問題点として各地区から意見されていた。

よって、行政側の対応として新しい動きに進んでいけるような政策を積極的に伝えていくことが各地区のモチベーションを保つひとつの方法であるといえる。

図 4-26　地区Ｅ夏祭りの風景
(コミュニティ構築の場となっている)

図 4-27　毎年 1 月におこなわれる
繭玉祭りの風景

図 4-28　ふれあい祭りの風景 名物のひとつである柿と芋をふるまった)

【地区Ｆのまちづくりへの取り組み】

タイムスケジュールから分かるように、行政の呼びかけに細かに対応し、地区計画で提示された事業をきちんとこなした地区だと言える。ワークショップでは、地区Ｆに古くから伝わり、各戸が管理、維持している石仏の勉強会を区民参加のもと行うなど、積極的に活動した。また、シンボルとしても､外部からの来訪者のある桂の木や、各家が世話をしている石仏など、テーマ選びは難しくなかった地区であるといえよう。しかし、地区推進委員会立ち上げ時に、第 3 次総合発展計画の時から形骸化したまま残っていた地区推進委員会を地区推進委員からはずしてしまったことで､地区推進委員の反感を買ってしまい、結局、アクション事業申請時に地区のお金を出すことを地区推進委員に猛反対されて頓挫してしまった。

図 4-29　外部からの来訪者もあるという桂の木

町のほうでおおよその地区推進委員の人数を決定してしまったためなのか、組織的な問題なのかは分からないが、区費を出すことは各地区においてひとつの大きなハードルとなっている。この地区から分かるように、日常的なコミュニティづくりが背景にあってこそ、まちづくりを進めていくことができるといえる。

図 4-30　家の軒先に祀られている石仏

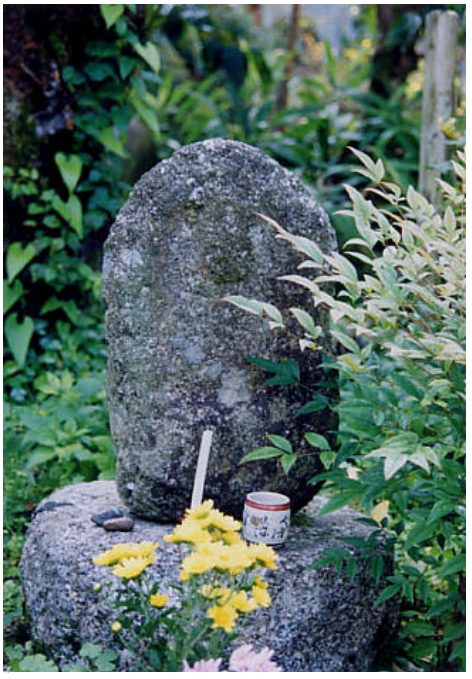

図 4-31　庭に祀られている石仏

図 4-32　道路わきに祀られた石仏

図 4-33　地区内に点在する石仏

Ⅲ.目標達成型Ｂまちづくり

前半に活動が偏っている地区が多い。ワークショップを取り入れている地区も 1 年目に偏っている。

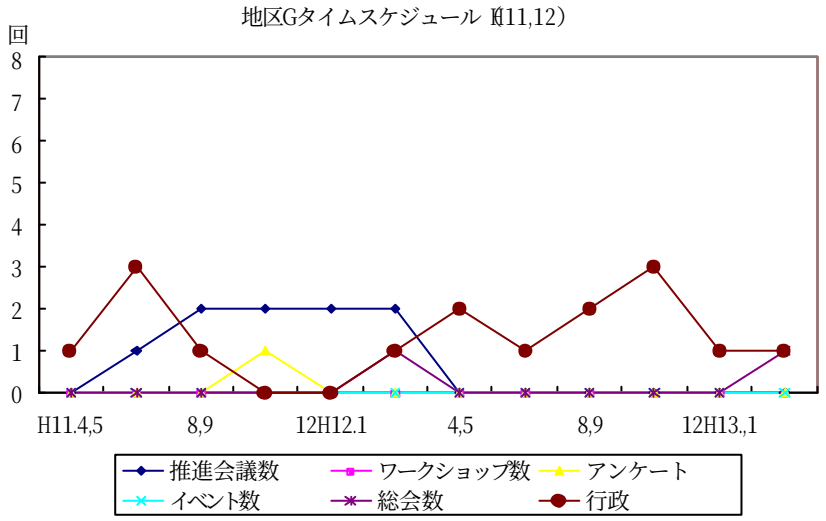

図 4-34　地区Gタイムスケジュール

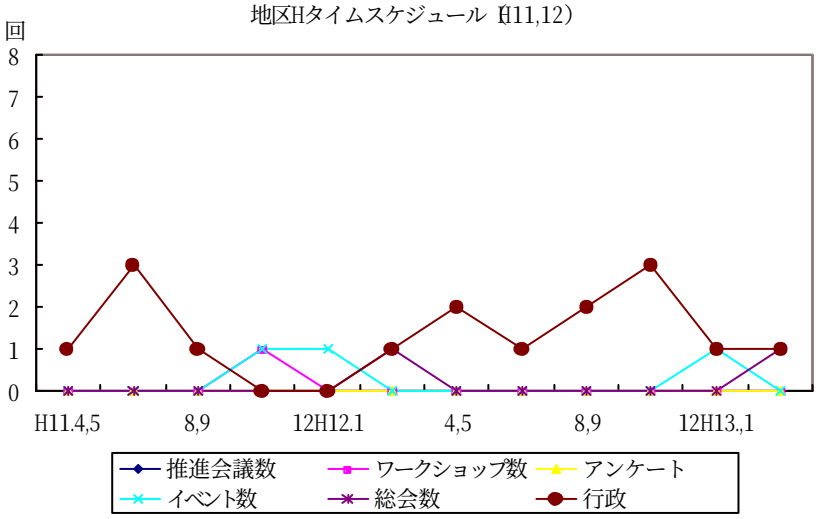

図 4-35　地区Hタイムスケジュール

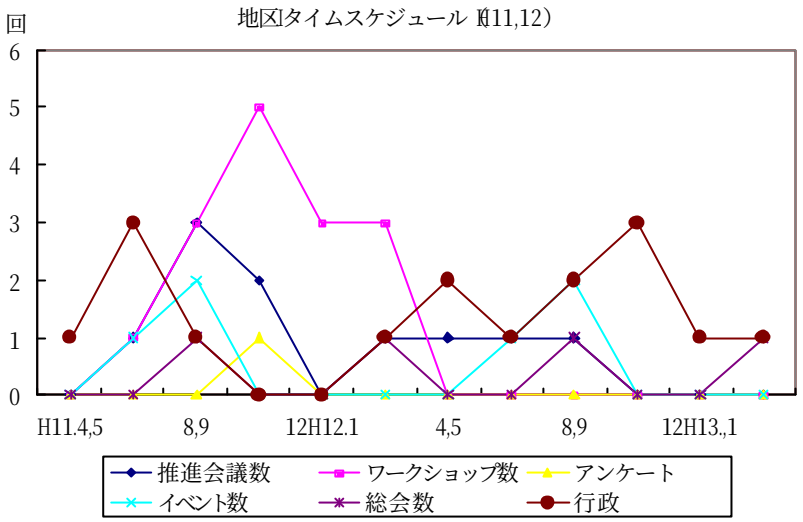

図 4-36 地区 Ｉタイムスケジュール

【地区Ｇのまちづくりへの取り組み】

１年目は活発に動いているが、２年目は「行政から何か言ってきたらやる」という程度であった。「区の財政だけじゃなく地区Ｇのお金も必要だったので難しかった」とアクション事業の感想を語ってくださった。また、１年目と２年目でリーダーを変えるなどリーダー不在も大きな要因であったようだ。ワークショップも行わなかった地区Ｇは「ふれあい祭りを参考にした」そうだ。結果として、地区Ｇは現在まちづくりに対する動きは一切ないそうだが、ふれあい祭りという各地区の取り組み紹介や、展示、販売を行うイベントが身近な地区の取り組みを参考にする貴重な機会となっていることが分かった。

【地区Ｈのまちづくりへの取り組み】

地区Ｈは推進会議数のデータが取れなかったのだが、地区Ｈには第３次総合発展計画のときの地区推進委員会が形骸化した形で残っており、具体的な動きはなかったものの、先進地視察に予算がついたため、地区推進委員が日頃から話していたＺ島への見学を果たすことができた。結果としてＺ島見学が地区Ｈのまちづくりに貢献したかどうかは分からないが、事業のみならず、ワークショップなど計画策定のために補助がつくことは地区にきっかけを与えたと考えられる。

【地区Ｉのまちづくりへの取り組み】

地区Ｉはワークショップを中心にまちづくりを進めた地区である。しかし、ワークショップに一般区民が全く参加する機会がない一方、まちづくりのテーマは家庭版 ISO という全戸を巻き込んだ事業を設定したという矛盾が生じたことが、区民の理解を得るのが難しかった原因の一つと考えられる。また、アクション事業申請にあたって、他地区は自分達

の地区にあるシンボルをまちづくりのテーマに選んでいるのに対して、地区Ｉだけが生活に密着したテーマを選んでいる。テーマを環境問題に設定したのは「地区Ｉにはシンボルがないから」と言う経緯があったからだそうだが、やはりいきなり環境に配慮した生活を目指そうと委員会が言い出してもなかなか区民としては理解できない部分が多かったようで、何でうちの地区だけと反発もあったようだ。まずは地区の自慢を引き立てる目標選びが大切だと言えるだろう。

図 4-37 とんど焼きの風景(地区Ｉ

Ⅱ.委員長孤立型まちづくり

通年で緩やかな活動をしているグループ。ワークショップは両地区とも 1 度しか取り入れていない。

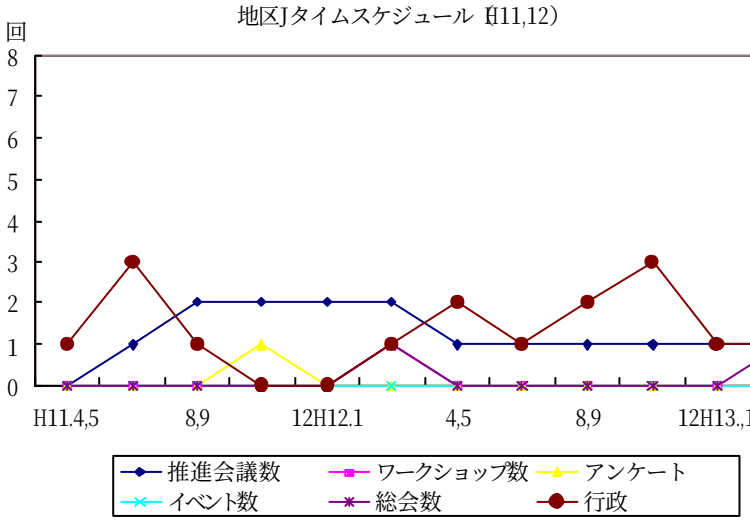

図 4-38 地区Ｊタイムスケジュール

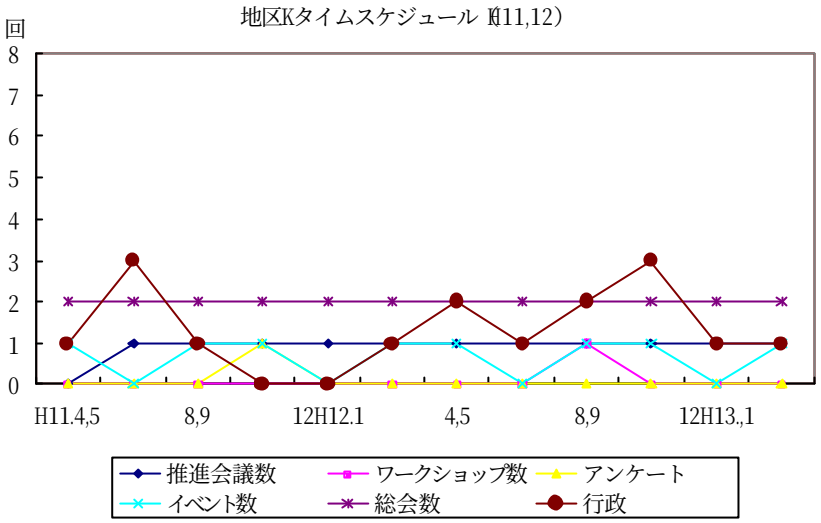

図 4-39 地区Kタイムスケジュール

【地区Ｊのまちづくりへの取り組み】

図 4-40 地区Jのちまきづくりの風景

１年目は月に１度のペースで推進会議に取り組んでいたが、２年目からは２月に１回にペースダウンしている。また、ワークショップも先進地に区民と共に１回行ったきりである。アクション事業に関しては「話はしていたのだがまとまらなかった」「(事業では)サポートがほしいのではなく、住民の意識改革が難しい」「まちづくり委員長が長としての理想と区民との板ばさみになっている」と語った。地区Ｊはイベントがひとつもないため、イベントに対する組織もなく組織をうまく取り込むことができずに委員長がひとりで背負い込んでしまった状況であると推測する。このような地区には地区内の組織化が必要である。

地区Ｊには伝統としてに伝わるちまきづくりがあるのだが、これも地域の高齢者がおもな参加者で、若者の参加は少ないという。

アンケート項目「先進地見学に参加したいか」という問いに 20 代以外の年齢層では半数以上が「できれば参加したい」、もしくは「ぜひ参加したい」と答えている。この結果をみて

も、世代間交流のきっかけをもつことで、新しい動きに発展するのではないかと考えられる。

【地区Kのまちづくりへの取り組み】

小さな地区である地区Kは、総会が意思決定の場である。小さな地区特有の人員的、財政的困難を抱えている地区である。また、圃場整備の際に土地の譲渡をめぐってちょうど不和な時の地区計画であったこともあり、まちづくりに関する議論がなかなか進展していかなかった。

委員長はもともと歴史や自然環境に思い入れの強い方で、委員長が一人で看板の設置などを行っている。現状を打破するためのひとつの策として、他地区の人と共同でひとつのテーマに取り組むなどの方法も考えられる。そうすることで、区民としても活動の場が広がるし、他地区も含めてみたときに自分の地区の位置付けを認識することができると考える。また、小さい地区の抱える「資料館を村で建てようってやってるわけやけども資料館を建てる際の、うちの村は小さいから補助金がもらえない。大きい村やったらできるけどね」という望んでも補助金がまわってこない状況を、複数の地区で取り組むことで打破することができるのではないだろうか。

Ⅵ.委員長無関心型まちづくり

ほとんど動いていない地区もしくは1年目に推進会議およびに協議会を行い、2年目にはほとんど動きのなくなってしまった地区が多い。

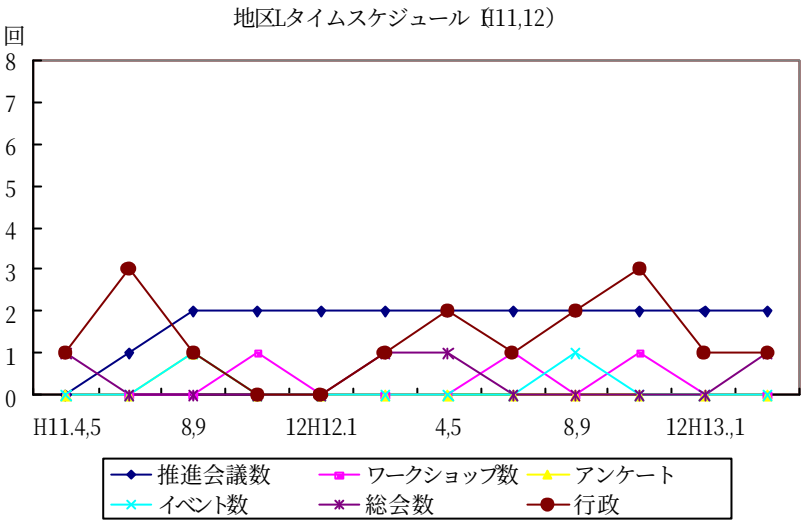

図 4-41　地区Lタイムスケジュール

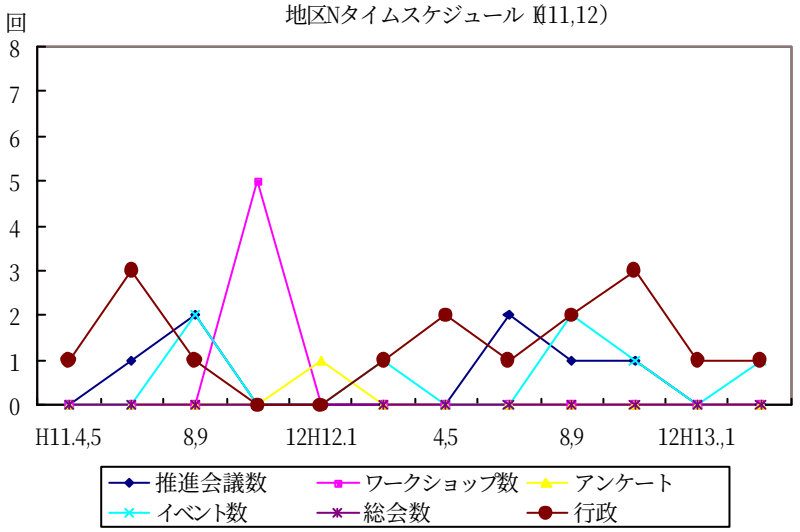

図 4-42　地区Nタイムスケジュール

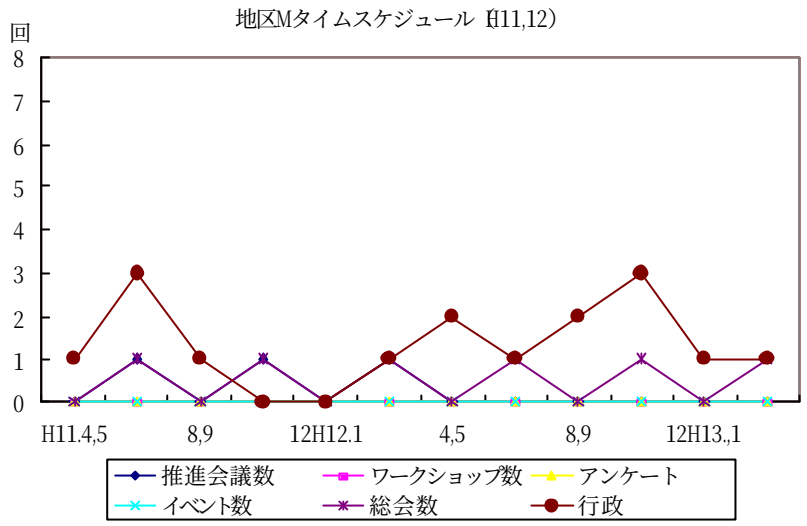

図 4-43　地区Mタイムスケジュール

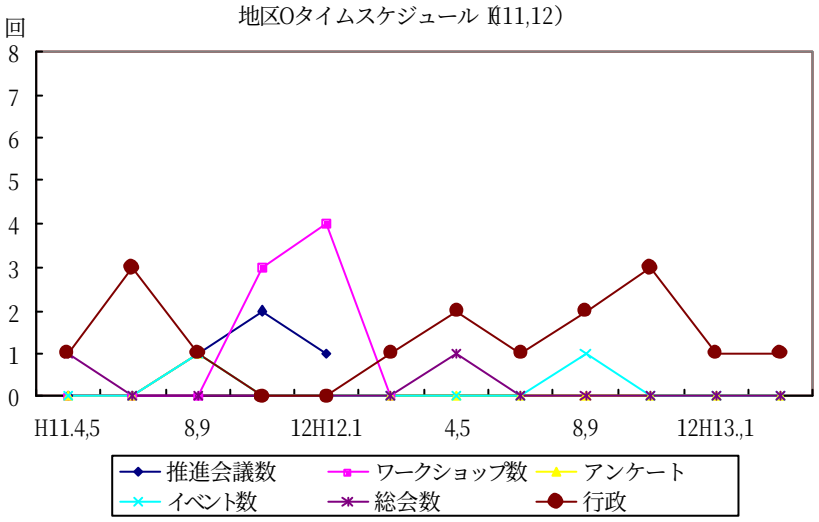

図 4-44　地区Oタイムスケジュール

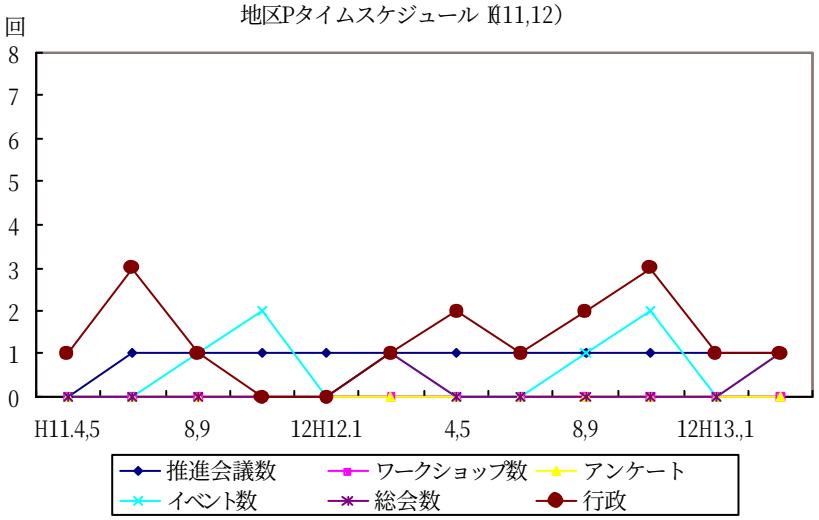

図 4-45　地区Pタイムスケジュール

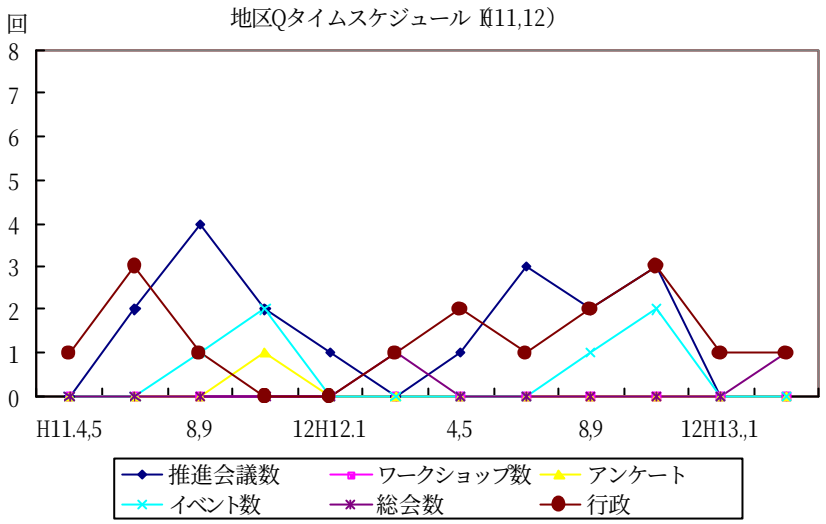

図 4-46　地区Qタイムスケジュール

【地区Ｌのまちづくりへの取り組み】

委員長無関心型のグループで唯一地区外視察に行った地区。地区Ｌの委員長は地区計画に対して「住民では分からないことが多い」「個人負担ではじめるつもり」と町の政策から一旦背を向けたものの、農業山村振興事業枠で、放置されたままだった畑を利用し、特産品づくりをはじめたそうだ。しかし、世代間交流が無いため、一部の人の活動にとどまっている。事業をコミュニティの成熟を促す方向にもっていく必要があるだろう。

図 4-47　農地開拓特産品づくり

【地区Mのまちづくりへの取り組み】

総会のほかに推進会議も 2 年目は全くせず、1 年目も年に 3 回集まっただけという地区Mは、人口が 51 人で、ほぼ全戸の家主が推進委員長に名を連ねているといった状況である。よって、予算的な面からも、人員的負担からも地区計画に取り組むには難しい地区であったと言える。しかし、地区Mは委員長が森林を大切にしていこうと、6 年前(平成 7 年)から山に植樹をはじめた。これは最初の 10 年間に限り、国が植樹用の木および維持管理にかかるお金を全額負担してくれるという制度である。「この制度だったら地区Mのお金を出さんでもいいし。こんな小さい地区Mが、財政が乏しいのに金を出すようなことはなかなかで

きなんし」と言うことで取り組みをはじめた。しかし「始めに植えだした奴が実際（10 年たった後に枝打ちなどに）行けるかどうか、これを心配しとんのや。」と高齢化が進む村がまちづくりにおいてもまた後継者不足に悩む心内を語ってくれた。地区Mのように高齢化が進み、活発的に動けない地区への対応策としては、複数の地区もしくは町としてのアイデンティティを行政と共に発見し、町の中でのひとつの緩い枠組みを作った中で近隣地区と協力しながら地区の特色を出してまちづくりを進めていくことで解決できると考える。

図 4-48 地区Mのわさび沢

図 4-49 地区M集落の概観

【地区Nのまちづくりへの取り組み】

協議会を行っていた時期だけ活発で、後は町からの提出物を求められた時に会合を開く程度となっている。地区Nはアクション事業に申請をしたがそれも話し合ったがいい意見が出なかったので委員長が一人で考えて出したそうだ。地区Nのまちづくりの壁としては「キーマンがいない」「委員の選び方が悪かった(数合わせのために委員ばかりを選んだ)」「年寄りが足を引っ張る」などが挙げられた。地区Nは総会がなく、組長会でほとんどのことが決まってしまう。それでも決まらない時には常会といって組員が集まって会合を開く。そのため、区民は地区を意識する機会が少ないと予想される。また、伊吹町内では都市部に位置するため、まちづくりの必然性を感じる機会も少ないと思われる。「結局はこんなんせんくても、食っていけるがなっていう」といった意識が委員長や委員らにあったと言えるだろう。しかし、地区N地区は太鼓踊りを地域の自慢としている地区であり、同じく太鼓踊りを行っている地区Ｓ、地区Ｄなどと共同でイベントからまちづくりをすすめていくことができる可能性があるのではないだろうか。そのような協力体制の中で、地区内のリーダーの素質を持った人を育てる姿勢が必要だろう。

【地区Ｏのまちづくりへの取り組み】

地区Nと同じく協議会を開いてそのまま動きが途絶えてしまった地区である。リーダー的な人材がいないことが発展の壁になっている。アクション事業に申請しなかったのも「案が出なかった」「メンバーの構築ができなかった」など。この地区も「地区Ｏは恵まれている

ようで恵まれていない」という発言のように 365 号線が横切っている地区でありながら近隣の市町村に人が流れていってしまっている状況だ。「協力体制のなさ」も問題点として挙がっており、まちづくりを進めるのが困難な状況にある。この地区も、リーダーを育てるための取り組みを行うことで、一歩前進できるものと思われる。地区Ｏには宝生会という元消防団グループがあり、夏祭りや桜の植樹などを請け負っていると言う。そのような団体のリーダー的存在の人をうまく育てることが先決であると言えよう。

【地区Ｐのまちづくりへの取り組み】

ほとんどアクション事業に反応しなかった地区。で推進委員会も 2 月に 1 回程度である。もともと伝統を大切にしてきた地区であるが、時代の移り代わりに伴って、イベントやオコナイのかたちを変えるかどうかが地区Ｐにとってここ数年の問題点だという。そのような流れの中で地区Ｐ独自の価値観を築くことがこの集落のまちづくりにつながると考えられる。

【地区Ｑのまちづくりへの取り組み】

アクション事業に対しては反応しなかったものの、推進会議などには積極的に取り組んだ地区。ここ数年で、イベントや総会、総出が地区を意識した区民づくりにとって大切だという推進委員長である井上さんの働きかけで、近年、夏祭りや総出などを復活させた。しかし、アクション事業に関しては、委員長に「やる気がなかった」ため、提出しなかった。地区Ｑもアクション事業に関しては、委員長のやる気が見られなかった地区といってよいだろう。説明対象を広げる必要がある。

4－4 本研究の分析結果のまとめ

伊吹町内の各地区をまちづくりステップ達成状況ごとに 6 グループに分類し、4 つの軸および各地区の詳細な背景から伊吹町地区計画策定プロセスにおける各地区の動きと現状を分析した。

まず、地区の基礎的要因から観光化されているようなシンボルを持つ地区でも、その生かし方に対して議論を深めない地区は、まちづくりに対する姿勢が根付かないことが分かった。また、イベントの減少、総会回数の減少は地区内でのコミュニケーションをとる機会の減少を意味し、まちづくりのステップ達成のハードルとなることが分かった。

次に地区推進委員長からの考察から、地区推進委員長には地区外で活動経験のある若手の人材が望ましいことが分かった。

地区推進委員からの考察では、委員は区長などの地区の人材を把握している人が指名することが望ましいことが分かった。また、女性を委員会に参画させることで今までの男性主体の区政とは違った広がりが出ることが分かった。

まちづくりのすすめ方からの考察では地区内視察および勉強会を実施し、自らの地区の現状を見て、議論を深めることが必要であることが分かった。また、ワークショップは委員だけが参加するのではなく、区民の参加を募ることで区民の理解を得やすくなることが分かった。また、ワークショップを進んで取り入れない地区はふれあい祭り(各地区の取り組み所今日を発表する機会)で、刺激を受けていることが分かった。

アンケートからの分析では地区のおかれた状況を区民に認識させ、それを踏まえた上で地区の将来提案してもらうことが、より現実味のある回答を引き出しやすいのではないかという提案ができた。

時間軸からの考察では、ステップ達成状況の低い地区は 1 年目からワークショップを多く取り入れ、推進会議をじっくり行わない傾向が強く、逆ステップ達成状況の高いグループは 1 年目にじっくりと推進会議を行い、2 年目から構想を実現化させたワークショップを行っている傾向が強いことが明らかになった。また、ワークショップを行った後に反省会の機会を持っている地区はより達成状況が高くなっていた。